

國文選 第二版 卷五

375.9
Ka11
資料室

41736
教科書文庫

4
810
41-1933
200030
2044

Kodak Gray Scale

G
Y
M

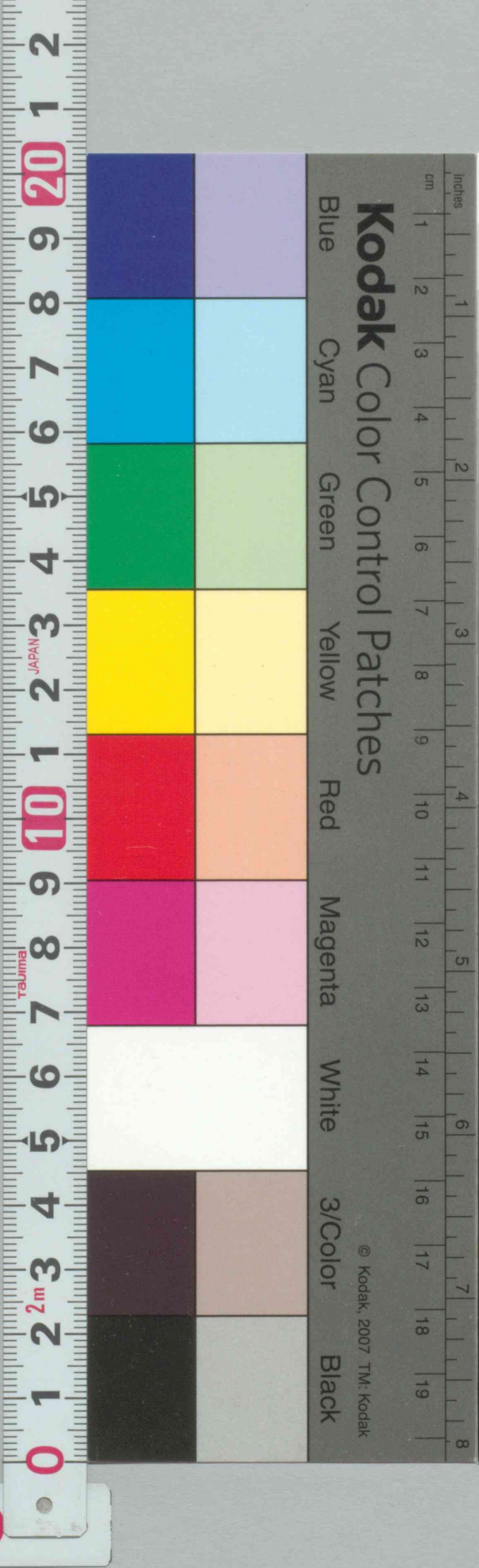
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



資料室

日九月二十年八和昭

濟定檢省部文

用科語國校學業實 用科文漢語國校學中

國文選

第二版

東京高等師範學校教授
垣內松三編

375.9
Ka 11

國文選

- 一 縦に學年を貫き横に學期に互りて特に全篇の組織に留意せり。
- 一 文化と國語との關係を基本として國民精神の涵養を意圖せり。
- 一 教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。



目次

一	島崎藤村	文章の道	四
二	大町桂月	九十の春光	二〇
三	薄田泣菫	奈良二題	七
四	夏目漱石	京の春	三
五	上田敏	汽車に乗りて	四〇
六	室鳩巢	春秋の争	四
七	尾崎紅葉	浦松小四郎	四
八	曾我物語	空行く雁	四
九	平家物語	故郷の花	六
一〇	源平盛衰記	鶉越	六
一一	金子元臣	歌がたり	六

二	本居宣長	玉かつま鈔	八
三	賀茂真淵	岡部日記	九
四	吉田兼好	四季	六
五	森鷗外	高瀬舟	一〇〇
六	長塚節	金華山	二六
七	沼波瓊音	時雨	二六
八		花の雲 (俳句)	三三
九	横井也有	百蟲譜	三五
一〇	上田秋成	白峯の陵	四一
一一	太田水穂	個性	四五
一二		いちはつの花 (和歌)	五五
一三	正岡子規	小園の記	五七

附録 誤り易き語法

一 文章の道

一

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には経験のなかつた私も、漸く岸を離れることが出来るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏も水泳場へ通ふうちに、向うの河岸まで泳ぎ越すことが出来た。更にまた一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んでゐた頃に、よくも分らなかつた水瀬の速い遅いも分つて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと温かいも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を泳ぎながらに見ることも出來た。板子なしには溺れるの外なかつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は普通の

泳ぎ手が行ける處までは自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなか／＼容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、拔手の上手な人などを見たりした時は、全く感嘆してしまつた。



島 崎 藤 村

文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして『根氣』さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違ない。

二

信州の小諸にゐた頃、私は弓をやつたことがある。誰でも最初のうちは、的に向かつて矢を當てることばかりを心掛ける。唯當りさへすればいゝ。さういふ時代には、幸ひに一本の矢が

小諸 長野縣北佐久郡の町。

的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場處へ飛んで行く。射手の心に頼むところもなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸ひに當つた矢は高慢で煩はしい『熟練』を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ『姿勢』を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、たとひ的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場處を行くやうになつた。

これは文章の道にも當筋めて見ることが出来る。唯好き文章をのみ作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好き文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ『自己』から正してかゝらなければならぬ。

三

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鋤をかついで行つて土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれをやつた。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には、大根、白菜、茄子、豌豆、胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、肥料をかけてやつた。馬鈴薯の花が白く盛りな頃に出て、試みに土の中を探つて見ると、はや丸い奴が幾つも幾つも根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みついた。畠の中には、嫩く生つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから、私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手で好く整理された畠の間などを

一手さき的き矢二筋を一組として數ふる單位。

歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感
じられるやうになつた。私はある耕地を通つて非常に嚴肅な
念に打たれたことを、今でもよく思ひ出すことが出来る。

われ／＼が文章の手本とすべきものは、何ほどわれ／＼の
周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無い。それを
悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければなら
ない。『試みる』といふことは、『悟る』といふことの始だ。

四

浅草の新片町に住んだ頃、家は浅草橋や兩國橋に近くて、私
はあの隅田川の界限を漕廻つたことがある。最初のうちは、無
暗に手足を動かさし、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し
手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進ま
なかつた。次第に私は手足を動かすことが少なくて、身體全體の

新片町 東京市浅草
區。

力で、ゆつくりと櫓を押すことが出来るやうになつた。向うか
ら大きな傳馬がやつて來たぞ、あいつに一つ衝當らないやう
に、さう思つて漕いで行く楽しみなども、それから起つて來た。
それから船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたもの
だ。そこには力の省略がある、『簡素』の美がある。

文章の道にも、無暗と筆を弄することが決して自己の眞の
『表白』とはならない。眞に好い文章には、眞に好い『結晶』の力があ
る。

(島崎藤村「飯倉だより」)

島崎藤村 名は春樹。
詩人・文學者。長
野縣の人。明治學
院卒業。

すぐれた人の書いた好い文章は、それを黙讀するばかりでな
く、時には心ゆくばかり、聲をあげて讀んで見たい。われ／＼はあ
まりに黙讀に慣れすぎた。文章を音讀することは愛なくては叶
はぬことだ。(島崎藤村)

二九十九の春光

一

秋の風は泣くなり。冬の風は怒るなり。春の風は笑ふなり。
 春の風の吹くところ、そこに淡雪消えて若菜萌え、谷川の氷
 解けて波の花まづ咲く。枯木活きて芽を吐き、焼痕蘇りて蕨の
 柔拳空を擱まんとす。二十四番の風吹きつくして、梅咲き、桃咲
 き、櫻咲き、九十の春光到るところ、駘蕩として春の海の如く、人
 は花に送られ花に迎へられて、心おのづから長閑なり。
 春は命なり、萬物みな生きて動く。春は愛なり、天地共に笑ふ。
 少年を人生の春とすれば、春は天地の少年なり。

二

梅や、桃や、梨や、李や、果實あるがゆゑに牆籬の中に鎖さるゝ

も、櫻は幸ひに食はるべき果實を持たず、野に山に、到るところ
 春を飾る。これ櫻ならでは得べからず、また日本ならでは求む
 べからず。我が日本を櫻花國とは、言ひ得て切なるかな。

櫻は多きをよしとす。一目千本、満山みな櫻、朝陽と相映發す。
 何等の美觀ぞや。されど、人跡絶えたる山奥、清水ちよろゝと
 流るゝあたり、よしや、事を解せざる詩人は、紅葉と共に夜の錦
 にならずらふとも、その梢とも見えざりし一本の櫻の花に現る
 るもまた興ならずや。

散るを惜しむは櫻を愛する所以にあらざるべし。一陣の春
 風に、千片また萬片、惜しげもなく枝を辭して、空に香雪を漲ら
 し、地に錦繡を布く。一二片雨に和して酔顔を打つもまた悪し
 からず。櫻は散るさまこそ最も愛すべけれ。
 黄昏一犁の雨、入相の鐘を傳へて、十里の長堤、春漸く老いん

九十の春光 「九十
 春光去似櫻」
 (吳毅人)

谷川の氷 「谷風に
 とくる水のひまご
 とにうちいづる浪
 や春のはつ花」(源
 當純)

夜の錦 「見る人も
 なくて散りぬる奥
 山の紅葉は夜の錦
 なりけり」(紀貫
 之)
 その梢とも 「み山
 水その梢とも見
 えざりし櫻は花に
 あらはれにけり」
 (源賴政)

とす。知らず、江上の漁翁、網し得たる白魚と落花といづれか多
き。カワカサナガライニ櫻ノガタメクケツテキル

三

朧月夜に酔を買うて歸る。習々たる東風、面を吹いて寒から
ず。林下の一路、白模糊として、一脈の清香骨に徹す。嗚呼月の影
梅の香、古人をして「若くものなし」と詠ぜしめしも、かゝる夜な
りけん。

梅に取るべきは、その香、奇古なるその幹。花の色は白きを尙
ぶ。紅きは俗なり。一園内に行儀正しく列植するは、折角の梅花
を俗了す。竹外籬畔、臥龍の影を清淺の水に横たへ、黄昏一片の
月を添へて、暗香四野に浮動す。これ既に林和靖に言ひつくさ
れたれど、梅花この境を得て始めて始めて奇を現し、この境梅花を得
て始めて俗氣を脱す。

若くものなし「照
りもせず曇りもは
てぬ春の夜の朧月
夜にしくものぞな
き」(大江千里)

暗香「暗香浮動月
黄昏」(林和靖)
林和靖名は逋。支
那宋代の詩人。

四

菜花一路、胡蝶、人と相追ふ。春風の行方それと知られて、柳の
絲靡くともなく動くところ、水車ゆるく旋り、桔槔音なくして、
小犬籬根に眠る。遙かなる桃林の上に塔尖の出づるは伽藍あ
るにや。詣でて歸るとおぼしき村娘の一群、相和して歌ふ聲、漸
く遠く、漸く細く、遂に霞の中に消えゆく。

五

春日麗かにして、梅花一庭に薫ず。小猫縁に蹲り、少女二人追
羽子をつく。風死して、空にうなりし紙鳶みな地に落ち、一鳶ひ
とり高く盤旋す。

六

見渡す限り、菜花の黄、麥浪の青きに連なり、遠山霞みて低し。
陽炎燃ゆる野の空高く、美音嚙曉、天樂を聞く心地し、天使人間

に近づきて天の祕密を語るかと疑はる。諦視するにその處を知らず。かくて日西に沈まんとす。一羽の雲雀、その聲を載せ來りて麥生に落つ。淡月一痕、家路に歸る農夫の擔げる鋏にかゝれり。

七

春の花の大觀は、櫻と梅とにつきたれど、春信まづ福壽草に宿るも可憐ならずや。桃紅李白、世に俗なりと言ひ古されたれど、場處によりては趣あり。椿の花ぼつりんと水に落ちて波輪を起すも、閑適の趣なしとせず。菫、蒲公英の優しき、木蓮の氣高き、見もて行けば限あるべしとも覺えず。山吹、牡丹、芍薬、菖蒲、藤、滴るが如き新緑、これ人間の春に洩れたれど、天地の春を粧はずんばあらず。

八

春を飾るものは、第一に花なり、天地美裝す。第二に鶯歸雁、雲雀なり、自然の音楽をなす。第三に暖氣なり、寒からず熱せず、心おのづから草木と共にゆるぶ。第四に霞なり、日光これに當りて景致やはらぎ、月影これに映じて夜色更に幽なり。

九

春雨また春の一觀たらずんばあらず。蓑きてくだす筏師に霞むあしたの雨を知るとは、千蔭の歌に入りしところなり。降るとも見えぬ雨に、黄塵收り俗客去りて、天地おのづからしめやかなり。閑窓の下、靜かに碁に對して、一層の幽寂を感ず。

十

佐保姫春を司り、立田姫秋を司る。請ふ、余をしてこの二様の神を相對比して想像せしめよ。佐保姫は優婉なり。曲眉豐頬、二重險の目元愛くるしく、丸顔

天地自然ノ景色ヲ美化ス

自然ノ春ノ美觀ヲ美化ス

蓑きて「隅田川蓑きてくだす筏師にかすむあしたの雨をこそ知れ」加藤千蔭

千蔭 加藤千蔭。國學者。江戸の人。文化五(二四六八)年歿、年七十二。

にして白く肥りたるにあらざるか。立田姫は清淑なり。鼻高く、口元凛々しく、眼涼しく、顔少し長く、體稍、瘦せたるにあらざるか。佐保姫は溫和なり、春の初風の暖きが如し。立田姫は爽快なり、秋の初風の心地よきが如し。立田姫は嚴肅なり、怒りて淅瀝セキの聲をなす。佐保姫は寛厚なり、靄然として微笑む。松蟲、鈴蟲はこれ立田姫の歌へるなり。鶯はこれ佐保姫の歌へるなり。櫻は佐保姫の衣なり。紅葉は立田姫の衣なり。霜白く、月清し、これ立田姫の姿なり。霞匂ひ、花香る、これ佐保姫の姿なり。佐保姫は情篤き淑女なり。立田姫は意志強き烈女なり。しめやかなる春雨は、佐保姫の慈悲を現し、樹草におく秋霜は、立田姫の威嚴を現す。

我は立田姫を敬し、佐保姫を愛す。(大町桂月「桂月全集」)

大町桂月 名は芳衛。文學者。高知縣の人。東京帝國大學卒業。大正十四年歿、年五十七。

三 奈良 一一題

森の聲

自分は今春日の山路に立つてゐる。路の兩側には數知れぬ大木が聳え立つて、枝と枝との絡みあつたなかには、潤葉、細葉がこんもりと繁つて、たま／＼その下蔭を往く山番の男達が晝過の空合を見ようとしたりと、何といたつても承和の帝から禁山とめやまのは容易なことではない。何といたつても承和の帝から禁山の御宣旨があつて以來、今日まで斧一つ入らぬ神山である。夏が來て瑞葉がさし、冬が來て枯葉が落ちる。落ちた木の葉は歳々の夢を抱いて、そのまゝ再び地に朽入つてしまふ。かうして千年の齡を重ねて見れば、一體の山の風情が其處等の出來あひの雜木林と趣を異にしてゐるのも無理はあるまい。大氣は冷

承和の帝 仁明天皇を申す。

たい。山の肌は何時も下濕りがしてゐる。ありふれた山では秋
でなくては嗅がれぬ土のほひが、何やら物さびた調子を帯
びて、しつとりと薫る。その昔、其處の延根^{ひね}では人麿が躓いたか
も知れぬ。此處の古樹では往きずりに行基の袖が觸れたかも
知れぬ。目路の限りに連なる凡ての物は、自然に對する吾等の
渴仰と驚嘆とが白熱の高調に達したそのかみの代より、その
まゝに呼吸を續けてゐるのである。

大いなるかな春日の森。海原をつくり、焰の山をつくつた大
自然の手は、こゝに又春日の森を造つてゐる。杉は曉方の心あ
がりに、天にも伸びよと丈高に作つたものらしい。櫟^{いちょう}は月曜の
午前、健やか心の一瞬に産落したものらしい。竹柏^{たけがら}は夕暮の歌
であらう。馬醉木^{あせび}は折節の獨り言かも知れぬ。いづれも持前の
性分を思ふまゝに見せて、側目も振らずすく〜と突立つて



春 日 の 森

人麿 柿本人麿。奈
良時代の歌人、歿
年未詳。
行基 奈良時代の僧。
天平二十一年（一四
〇九）年寂、年八
十。

ある。大空は微笑を湛へて額の上にひろがつてゐる。第一の光明はわが掌にといつた風に、いづれも骨太の腕をさし伸べてゐる。地に産まれて天を望むといふのは思ふだに痛ましい。痛ましいに違はないが、その昔嫩葉を芽ぐんだ日より、持つて産まれたおのがじしの宿命である。木はその宿命を樂しんで、自らの代の終るまでは、たゞの一日たりともその努力を休めぬ。時は皐月の半ば、水銹沼の藻も花を飾らうといふこの頃である。薄曇りした蒸暑い正午過ぎの温氣に、葉は葉のいとなみをし、根は根のいそしみをし、幹は幹のつとめを勵む。まことに烈しい生活の有様である。

大杉のひとつがいふ、餘り高くなり過ぎて、どうにも心さびしくてならない。それにあの雲の襞がうるさい。電光など落ちて來るといふ。若い馬酔木がいふ、背低も厭になつた。土の香が

嶺然頭角

鼻につき過ぎる。昨日を忘れる術は無いか知ら。老樹の櫟
 がつぶやく、生命にも少し飽きたやうだ。鷲は何處へ往つたか
 知らぬ。良辨を落したまゝで、いまだに歸つて來ない。待つてゐ
 る間に千年の夏は經つてしまつた。餘り短い月日でもなかつ
 た。竹柏が又いふ、何だか言葉が欲しくなつて來たやうだ。
 空には雲も薄らいで、そろ／＼天氣が直つて來たらしい。初
 夏の氣力に満ちた白い光が、ひとすぢさつと黒ずんだ竹柏の
 枝を洩れて、花やかに樹々の幹に落ちる。すると鳶色がかつた
 縦や、白味の勝つた櫟や、干割れた竹柏の樹の肌が、陰鬱な森の
 空氣にくつきりと浮上がつて、さながら古寺の内陣で、手燭の
 火影に、名匠の刻んだ十二神將の脾腹でも見るやうに、引緊つ
 た健やかな氣持で眺められる。かゝる時に、若し木立の深みで、
 啄木鳥の木肌を穿つ音でも渡らうものならば、自分はきつと

良辨 奈良時代の僧
 幼時鷲にさらはれ
 て春日神社の社頭
 に落され、義淵に
 養はる。長じて僧
 となり僧正に進む。
 寶龜四(一四三三)
 年寂、年八十五。

外陣
 内陣ノ外
 ナリナカリ
 然

春日佛師がいまだに堂籠りして佛像を刻んでゐるのかとも
 思ひ疑つて、日がな一日それに聞惚れたかも知れぬ。

東大寺

月がよいので東大寺のあたりへ出掛ける。すく／＼と大樹
 の立ちこめた境内の木立には、月の光も流れかねて、陰森の氣
 が煙のやうに迷うてゐる。このやうな宵に、森のなかで路でも
 迷はうものならば、きつと小さな魔ものの係蹄にかゝつて、夜
 一夜歩きまはつたところで、とても家に歸ることはむつかし
 からうと思はれる。
 南大門は撞木杖をついた翁のやうに支柱に凭れて、そのす
 ばらしい軀をぢつと空に擡げてゐる。密迹・金剛の二力士は、こ
 の靜かな宵にも、その三丈に餘らうといふ體を起して、胸肉を
 張り、寶杵を揮うて、ぐつと肘を張つて控へてゐる。銀の雫のや

惚惚

買

木ノ

城門(城戸)

撞頭

うな月明りが、盗むやうに窓にこぼれて、肩より脹脛にかけて半身にちら／＼と流れる肉むらの色が冷たく、また美しい。ちつと見てみると、嚴めしい顔の何處かに夢心地が漂つて、靜かに吐息でもついてゐるらしく思はれる。しかしそれほんの一瞬間で、すぐまた劫初天也開のかた寶杵を揮つて、教法を護つてゐる金剛神の威丈高な姿に歸つてくる。

佛殿の中門は閉されてゐる。ここにも月明りはしつとりと二天の木像に濕つてゐる。百間にも達かうといふ廻廊は、鳥の翼の



剛 金

やうに左右に開いて、はては見えなくなつてゐる。門の透間から覗いて見ると、金堂の扉は靜かに閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ瞬いてゐる。堂守の僧でもゐることか、どこかにひそ／＼と囁くやうな聲がして、それもやがて消えてしまふと、あたりは墓のやうな靜かさになる。天人の足音も聞えさうな宵である。このやうな靜かな夜を、ちつと佛殿の闇に閉籠つて、毘盧舍那佛は何を觀じてゐられるであらう。永祿の昔佛殿が炎上に罹つてより、百三十餘りの夏冬は、佛はいつも露佛でいらせられたといふ。その頃は夢のやうな月夜の靜かさに、醉心地になるまでも見惚れてゐられたであらう。そこしもなく、十六夜薔薇の匂ふ卯月の宵に、春日野の木立より洩れる流眇のやうな月明りに濡れながら、または佐保の川瀬に衣を晒す女の唄も眠つた眞夜中、秋篠のあたりに沈み入る夕月を眺めて、ひと

(1) 金堂
永祿十
年
秋
永
久
秀
の
兵
火
に
罹
る。

永祿の昔 永祿十
(二二二七)年松
永久秀の兵火に罹
る。



十六夜薔薇
佐保川 奈良縣添上
郡にある川。
秋篠 奈良縣生駒郡
平群村の古名。

り法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀じられた姿は、どれほどにか美しく、また偉大なものであつたらうか。今宵はそれらの追憶にしみじみと寂莫の盃を味はうてゐられるかも知れない。喬木は丈の高いがゆゑに寂しみもまた多いといふ。世に二つと無い偉大な毘盧舍那の身は、また他には知られぬ甚深な寂しみを抱かれるに相違ないと思ふ。

月は魔の如く踊つてゐる。今しがたまで、折々ばつさりと水の上に跳ねかへつてゐた魚は鎮まりかへつて、鏡が池は寐てしまつた。松の葉一つこぼれる音がせぬ。

百年も経つたかしら……

ふと頭の上で鐘が鳴る。九時ださうだ。もの寂びた古寺の宵はもう夜半過ぎの心持がする。（薄田泣菫「落葉」）

鏡が池 南大門の北方にある池。

薄田泣菫 名は淳介。詩人。岡山縣の人。

四 京の春

一 叡山登り

「随分遠いね。元來何處から登るのだ。」と、一人が手巾で額を拭きながら立留つた。

「何處か、己にも判然せんがね。何處から登つたつて同じ事だ。山はあすこに見えて居るんだから。」と、顔も體驅も四角に出來上がった男が無雜作に答へた。

反を打つた中折帽の茶の廂の下から、深き眉を動かしながら見上げる頭の上には、微かなる春の空の底までも藍を漂はして、吹けば揺ぐかと怪しまるゝほど柔かき中に、屹然としてどうする氣かといはぬばかりに叡山が聳えて居る。

「恐ろしい頑固な山だなあ。」と四角な胸を突きだして、一寸櫻

叡山 比叡山。京都・滋賀府縣界にあり。

の杖に身をもたせて居たが、「あんなに見えるんだから、譯はない」と、今度は叡山を輕蔑したやうな事をいふ。

「あんなに見えるつて、見えるのは今朝宿を立つ時から見えて居る。京都へ来て叡山が見えなくなつちや大變だ。」

「だから見えてるから好いぢやないか。餘計な事をいはずに歩いて居れば、自然と山の上へ出るさ。」

細長い男は返事もせず、帽子を脱いで、胸のあたりを煽いで居る。日頃からなる脩に遮られて、菜の花を染出す春の強き日を受けぬ廣き額だけは、目立つて蒼白い。

「おい、今から休息しちや大變だ。さあ早く行かう。」

相手は汗ばんだ額を思ふまゝ、春風に曝して、粘り著いた黒髪（まげ）の逆（さか）に飛ばぬを恨む如くに、手巾を片手に握つて、額ともい

はず、顔ともいはず、頸窩（けむのくぼ）の盡くるあたりまで、苦茶々々に搔廻（かきまわ）した。促された事には頓著（とんちやく）する氣色もなく、

「君はあの山を頑固（がんこ）だといつたね」と聞く。

「うむ、動かばこそといつたやうな按排（あんぱい）ぢやないか。こんな風に」と、四角な肩をい（こ）と、四角にして、あいた方の手に榮螺（さか）の親類を作りながら、聊か我も動かばこそその姿勢を見せる。

「動かばこそといふのは、動けるのに動かない時の事をいふのだらう。」と、細長い眼の角から斜（かた）に相手を見おろした。

「さうさ。」

「あの山は動けるかい。」

「あはゝゝ、又始まつた。君は餘計な事をいひに生まれて來た男だ。さあ行くぜ。」と、太い櫻の杖をひゆうと鳴らさぬばかりに、肩の上まで上げるや否や歩き出した。瘦せた男も手巾を袂（たもと）に

收めて歩き出す。

「今日は山端やまはたの平八茶屋で一日遊んだ方がよかつた。今から登つたつて中途半端ちゆうずはんぱんになるばかりだ。元來頂上まで何里あるのかい。」

「頂上まで一里半だ。」

「どこから。」

「どこからか分るものか。高の知れた京都の山だ。」

痩せた男は何もいはずに、にや／＼と笑つた。四角な男は威勢よく喋舌り續ける。

「君のやうに計畫ばかりして一向實行しない男と旅行すると、どこもかしこも見損つてしまふ。連こそいゝ迷惑だ。」

「君のやうに無茶に飛出されても相手は迷惑だ。第一、人を連出して置きながら、何處から登つて何處を見て何處へおりの

山端 京都市左京區
修學院町の一部。

のか、見當がつかんぢやないか。」

「なんの、これしきの事に計畫も何もいつたものか。高がある山ぢやないか。」

「あの山でもいゝが、あの山は高さ何千尺だか知つて居るか。」

「知るものかね、そんな下らん事を……君知つて居るのか。」

「僕も知らんがね。」

「それ、見るがいゝ。」

「何もそんなに威張らなくてもいゝ、君だつて知らんのだから。山の高さは御互に知らんとしても、山の上で何を見物して何時間かゝるぐらゐは、多少確めて來なくつちや、豫定通りに日程は進行するものぢやない。」

「進行しなければ遣りなほすだけだ。君のやうに餘計な事を

考へてゐるうちには、何遍でも遣りなほしが出来るよ。」と、猶さつ
さとして行く。瘦せた男は無言のまま、後に遅れてしまふ。

春はものの匂になり易き京の町を、七條から一條まで横に
貫いて、烟る柳の間から、^{アタククミン}温水水打つ白き布を、高野川の磧に敷
へ盡くして、長々と北にうねる路を、大方は二里餘りも來たら、
山は自ら左右に逼つて、脚下に奔る潺湲の響も、折れるほどに、
曲るほどに、あるは此方あるは彼方と鳴る。山に入りて春は更
けたるを、山を極めたらば、春はまだ残る雪に寒からうと、見上
げる峰の裾を縫うて暗き陰に走る一條の路に、爪先上りなる
向うから大原女が來る、牛が來る。京の春は、牛の尿の盡きざる
ほどに、長く且靜かである。

二 保津川下り
浮かれ人を花に送る京の汽車は、嵯峨より二條に引返す引

返さぬは、山を貫いて丹波に抜ける。二人は丹波行の切符を買
つて、龜岡におりた。保津川の急湍は此の驛より下る掟である。
下るべき水は、眼の前にまだ緩く流れて碧油の趣をなす。岸は
開いて、里の子の摘む土筆も生える。舟子は舟を渚に寄せて客
を待つ。

「妙な舟だな。」と宗近君が、いふ。底は一枚板の平らかに、舷は尺
と水を離れぬ。赤い毛布に煙草盆を轉がして、二人はよきほど
の間隔に座を占める。

「左へ寄つて居やはつたら大丈夫です。波はかゝりまへん。」と
船頭がいふ。船頭の數は四人である。眞先なるは、二間の竹竿、續
く二人は右側に權、左に立つは同じく竿である。

「ぎい」と權が鳴る。粗削りに平らげたる檣の頸筋を太い
藤蔓に捲いて、餘る一尺に丸味を持たせたのは、兩の手にむん

高野川 京都府愛宕
郡大原村より發し
南流して、京都市
の北にて、賀茂川
に合流す。

大原の院
寂光院
嵯峨 京都府南桑田
郡の町。

保津川 淀川の支流。
京都府北桑田郡の
山中に發し、曲折
して龜岡に到り、
東南流して桂川と
なり、遂に淀川に
入る。
嵯峨 京都市右京區
の町。
龜岡 京都府南桑田
郡の町。

づと握る便りである。握る手の節の隆きは、眞黒きは、松の小枝に青筋を立てて、うんと搔く力の脈を通はせたやうに見える。藤蔓に頸根を抑へられた權が、搔く毎に撓みでもする事か、強き頂を眞直ぐに立てたまゝ、藤蔓と擦れ、舷と擦れる。權は一搔毎にぎい／＼と鳴る。

岸は二三度うねりを打つて、音なき水を、停る暇なきに、前へ前へと送る。重なる水の蹙つて行く頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼りたる水は已むなく山と山の間に入る。帽に照る日の忽ちに影を失ふかと思へば、舟は早くも山峽に入る。保津の瀬はこれからである。

「愈々來たぜ」と、宗近君は船頭の體を透かして、岩と岩の逼る間を半町の向うに見る。水はこうと鳴る。

「成程」と、甲野さんが舷から首を出した時、船ははや瀬の中に

滑り込んだ。右側の二人は、すはと波を切る手を緩める。權は流れて舷に著く。舳に立つは竿を横たへたまゝである。傾いて矢の如く下る船はどゝゝと刻み足に、船底に据ゑた尻に響く。壊れるなと氣が附いた時は、もう走る瀬を脱けだして居た。

「あれだ」と、宗近君が指さす後ろを見ると、白い泡が一町ばかり逆落しに噛合つて、谷を洩れる微かな日影を萬顆の珠と我勝ちに奪ひ合つて居る。

「壯なものだ」と、宗近君は大いに御意に入つた。

「夢窓國師とどつちがいゝ。」

「夢窓國師よりこつちの方がえらいやうだ。」

船頭は至極冷淡である。松を抱く巖の落ちんとして落ちざるを苦にせぬやうに、權を動かし來り、棹を操り去る。通る瀬は様々に廻る。廻る毎に新たなる山は當面に躍り出す。石山・松山・

夢窓國師 禪僧疎石のこと。後醍醐天皇の知遇を辱うす。正平六(二〇一一)年寂、年七十七。

雑木山と數ふる遑を行客に許さざる疾き流は、船を驅つて又奔湍に躍り込む。



保津川下り

大岩を目懸けて突きかゝる。渦捲いて去る水の、岩に裂かれたる向うは見えず、削られて阪と落つる川底の深さは幾段か。乗る人のこなたよりは不可思議の波の行末である。岩に突當つ

に撃ちつけて散る水沫を、春寒く腰から浴びて、緑崩るゝ真中に舟こそ來れと待つ。舟は矢も楫も物かは、一途に此の

て碎けるか、捲込まれて見えぬ彼方にどつと落ちて行くか。――舟は只まともに進む。

「當るぞ」と、宗近君が腰を浮かした時、紫の大岩は早くも船頭の黒い頭を壓して突立つた。船頭は「うん」と舳に氣合を入れた。舟は碎けるほどの勢に、波を呑む岩の太腹に潜り込む。横たへた竿は取直されて、肩より高く兩の手が揚ると共に、舟はぐうと廻つた。此の獸めと突離す竿の先から、岩の裾を尺も餘さず斜に滑つて、舟は向うへ落ちだした。

「どうしても夢窓國師より上等だ」と、宗近君は落ちながらいふ。

急灘を落ちつくすと、向うから空舟が上がつてくる。竿も使はねば、權は無論の事である。岩角に突張つた懸命の拳を收めて、肩から斜に盲縞を掠めた細引繩に、長々と谷間傳ひを根限

り戻り舟を牽いて来る。水行く外に、尺寸の餘地だに見出し難き岸邊を、石に跳び岩に這うて、穿く草鞋のめりこむまで腰を前に折る。だらりと下げた兩手は、塞かれて注ぐ渦の中に指先を浸すばかりである。うんと踏張る幾世の金剛力に、岩は自然と擦滅つて、引懸けて行く足の裏を安々と受ける段々もある。長い竹を此處彼處と岩の上に渡したのは、牽綱をわが勢に逆はぬほどに疾く滑らすための策といふ。

「少しは穩かになつたね。」と、甲野さんは左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ切つ立つた山の遙かの上に、鈍の音が丁々とする。黒い影は空高く動く。

「丸で猿だ。」と、宗近君は咽喉佛を突き出して峰を見上げた。「慣れると何でもするもんだね。」と、相手も手を翳して見る。「あれで一日働いて幾らになるんだらう。」

「幾らになるかな。」

「下から聞いて見ようか。」

「此の流は餘り急過ぎる。少しも餘裕がない。のべつに駛つて居る。處々にかういふ場處がないと、やはりいかんね。」

「おれは、もつと駛りたい。どうもさつきの岩の腹を突いて曲つた時なんか、實に愉快だつた。願はくは船頭の竿を借りておれが船を廻したかつた。」

「君が廻せば、今頃はお互に成佛して居る時分だ。」
「なに、愉快だ。」

「自然は皆第一義で活動して居るからな。」

「すると、自然は人間の御手本だね。」

「なに、人間が自然の御手本さ。」

甲野さんは更に附加へた。

「瀬を下つて愉快だといふのは、御手本があるからさ。」

「おれにかい。」

「さうさ。」

「すると、おれは第一義の人物だね。」

「瀬を下つて居るうちは、第一義さ。」

「下つてしまへば凡人か。おや〜。」

「自然が人間を翻譯する前に、人間が自然を翻譯するから、御手本はやはり人間にあるのさ。瀬を下つて愉快なのは、君の腹にある壯快が第一義に活動して、自然に乗移るのだよ。それが第一義の翻譯で、第一義の解釋だ。」

「肝膽相照らすといふのは、御互に第一義が活動するからだらう。」

「まづ、そんなものに違ない。」

「君に肝膽相照らす場合があるかい。」

甲野さんは默然として、舟の底を見詰めた。言ふものは知らず。と、昔老子が説いた事がある。

「はゝゝゝ、僕は保津川と肝膽相照らした譯だ。愉快々々。」と、宗近君は二たび三たび手を敲く。

亂れ起る岩石を左右に縈る流は、抱くが如く、そと割れて、半ば碧を透明に含む光琳波が、早蕨に似たる曲線を描いて、岩角をゆるりと越す。河は漸く京に近くなつた。

「その鼻を廻ると嵐山どす。」と、長い竿を舷のうちへ挿込んだ船頭がいふ。鳴る櫂に送られて深い淵を滑るやうに脱けだすと、左右の岩が自ら開いて、舟は大、悲閣の下に著いた。

(夏目漱石「漱石全集」)

言ふものは知らず
「知者不言。言者不知。」(老子)
老子 支那周代の人。
姓は李。名は聃。
老子二巻を著す。
その終る處を知らず。

大悲閣 京都市右京
區嵐山の麓にある
寺をいふ。
夏目漱石 名は金之
助。文學者。東京
の人。東京帝國大
學卒業。大正五年
歿、年五十。

五 汽車に乗りて

赤松の林をあとに、
麻島ひだりに見つゝ、
汽車はいま堤にかゝる。
ほのかなる水のにほひに、
河淀の近きは著し。

三稜草生ふる河原に、
葦切はけしと噪ぎ、
鶺鴒こそ夏は來らね、
たま／＼に百舌の速贄。
篋鷺の何をか思ふ、

しよんぼりと立てる暇に、
紡績の宿にやあらん、
きりはたりはたりちやうちやう。
箴の音やゝにへだたり、
道祖神祭るあたりの
鐵道の踏切近く、
繩帶の檻樓の衣、
勝色は飾磨の染の
乳呑子を負へる少女は、
淺茅生の末黒に立ちて、
萬歳と囃し送りぬ。
萬歳はなれにこそあれ、



三稜草



篋鷺

飾磨 兵庫縣飾磨郡
をいふ。

幾年を生きよ、里の子。
人の世に尊きものは
土の香ぞ、國の御魂ぞ、
偽りの市に住まへば、
産土の神に離りて、
養ひを缺きたる人も、
埴安の郷の土より
生えぬきのなれに呼ばれて、
本然の命にかへる。

道芝の上吹く風よ、
農人の寢覺に通ふ
微かなる土のおとづれ、

なつかしき母の聲音か。
晝さがり草の香高く、
松脂のほひもまじる、
地の胸の乳房のかをり、
蘇門答刺の香も及ばじ。

忽ちに鐵のほひす。
鳴神の落ちかゝること、
汽車は今、橋に轟く。
桁構へ眼路を限りて
ひとり見る蛇籠の磔。
(上田敏「上田敏詩集」)

蘇門答刺 七種の香
木の一。

上田敏 文學博士。
東京の人。東京帝
國大學卒業。東京
高等師範學校・京
都帝國大學教授に
歴任。大正五年歿、
年四十四。

六 春秋の争

頃は彌生の半ばにもありけん、庭の櫻もやう／＼盛りなるに、驚さへ友をもとむる聲に打啼きて渡るめれば、今日來ずばあすは雪とぞひとりごちて、人まち顔なる折しも、登然たる音して五六輩打ちつれて問ひ來りぬ。

主もともに花のもとに團居してなん、數獻に及びて語りくらしつる中に、ひとりの客人、春の花ばかりめでたきものはあらじ。花紅葉といへど、紅葉は花なき時に見ればこそあれ、花には及びがたし。といへば、又ひとり、紅葉もさのみいひくたすべからず。秋霧の晴間に、千林萬壑さながら錦をさらす如くなるは、春の山も忘れつべし。今花に向かひてかくいふは、義山が殺風景の譏もあるべけれど、我は紅葉にぞ心をよする。といふに、

又ひとり、山有木工則度之、賓有禮主則擇之。とあれば、所詮主の心にまかすべし。といふ。

其の時翁いざり出でて、此の争は大津の宮の御宇に、大織冠に詔して其の沙汰ありしとかや。それより秋に心よするは多し。大伴黒主も、『錦をはれる秋はまされり』とかよみし。されど其の後代々の歌人、春に心よする人もあまた出で來て、『淺綠花もひとつに霞む』など詠み、『秋は夕べとたれかいひけむ』などもあれば、吉野の雪、龍田の錦は、伯仲の間にあるべし。さはいへど、豔陽桃李の節に先だつべき時しなければ、紅葉はつひに花におとるべし。但し此の事は清豫間暇のはかなき戲事に似たれば、いづれ優劣ありても、さてやみぬべし。今これをもて古の詔と武との樂を論ずるに、善諭と覺え侍る。昔孔子詔をば美盡くせり善盡くせりと宣ひ、武をば美を盡くせり、未だ善を盡くさ

彌生 陰曆三月の稱。
今日來ずば「今日來ずば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」(在原業平)

義山 支那唐代の人、李商隱の號。
山有木 左傳に「周諺有之曰」として見えたる語。
大津の宮 天智天皇六(一三二七)年、都を近江大津宮に遷す。
大織冠 藤原鎌足を

大伴黒主 延喜年間
の歌人。
錦をはれる 歌合と題せる書に黒主の間に答へし豊主の歌として見えたる歌。上の句は「春はたゞ花こそは咲け野べごと」に淺綠花も「淺綠花も一つに霞みつゝおぼろに見ゆる春の夜の月」(藤原孝標の女) 秋は夕べと「うす霧のまがきの花の朝しめり秋は夕べとたれかいひけむ」(藤原清輔) 龍田 奈良縣生駒郡の町。紅葉の名處として知らる。
昔孔子「子謂詔、盡美矣、又盡善也。謂武、盡美矣、未盡善也。」(論語) 詔は舜の作りし音樂。武は周の武王の作りし音樂。

ずと宣ふ。美は聲容の見事なるをいふ。善は美の實なりとあれば、美の出づるところなり。たとへば韶は春の花なり。武は秋の紅葉なり。花・紅葉ともにその見事さは更に優劣なきが如く、韶・武ともにその聲容の盛んなるに變ることはなけれども、花は春の陽和より咲出づれば、その見事さの中におのづから長閑なる氣を含めり。紅葉は秋の風霜より染めなせば、その見事さの中におのづからすさまじき氣を含めり。韶の樂は揖讓より出づるゆゑに、其の美の實優々として泰らかなる方に勝れたり。いはば春の花の陽和の氣あるが如し。武の樂は征伐より出づるゆゑに、其の美の實慄々として嚴なるかたに勝れたり。いはば秋の紅葉の風霜の氣あるがごとし。いづれも聖作といひながら、韶はあくまで手厚く、武も薄きにはあらねども、韶に比すればすこし薄きかたともいはん。それゆゑに韶は善盡くし、

武は未だ善盡くさぬなるべし。さればとて、春も秋も天なり、天の徳の同異ありとはいふべからず。舜も武王も聖人なり、聖人の徳に同異ありとはいふべからず。唯其の時の同じからぬゆゑと知るべし。韶は花の陽和の時にあへるがごとし。聖人の幸ひなり。武は紅葉の風霜の時にあへるがごとし。聖人の不幸なり。さればこそ程子もこれを論じて、『所遇之時然爾』といへるにあらざや。此のたとへほど始終よくかなひたる事は侍らず。各はいかゞ思ひ給へるや。』といへば、座中の人々もろともに感じて、日ごろ韶の善盡くし、武の未だ善盡くさずといふこと、くはしく自得しがたかりつるに、けふ戯れに花・紅葉の事を争ひて、計らざるに久しき惑を解き侍る。有り難くこそ侍れ。』とて、各額をつけて謝し侍りぬ。 (室鳩巢「駿臺雜話」)

程子 程顥のこと。
支那宋代の大儒。
弟頤と共に經書の
研究に新生命を開
く。道學を以て一
世に師宗たり。西
紀一〇三二—一〇
八五年)
所遇之時 論語の新
註に、「程子曰」と
して見えたる語。
室鳩巢 名は直清。
儒者。江戸の人。木
下順庵に學ぶ。幕
府の儒官たり。享
保二(三九四)十九
年歿、年七十七。

七浦松小四郎

高きは林か、低きは野か、たゞ一面に白く、なほちらく、名残を降らす曉の空、岡の片陰に破れ硝子の薄ら氷に、縁を取らせ



尾崎紅葉

し小澤近く、古りたる梅の樹、下は幹を染分け、上は紅蕊を包む雪。誰この美を亂し、この美を傷つく。

こは何事、低き梢に、切口より血汐を落す生首三つ結ひつけて、こ

ぼれ刃の長刀の朱に染まれるを幹の二又に寄せかけ、諸膝組んで雪を掬ぶ若武者。鎧は草摺小袖の下二段を萌黄に緘し、上を白絲、——そのはでやかさ、卯花緘、いかに手痛き合戦やしつる、射向の袖の菱縫の板はちぎれ、草摺の板をほつれてくだる

匂の絲、胴の絨毛には血液まだらに染むる散り紅葉、顱巻もなく、鬢髪大童に振亂し、額から眉を割つて、斜に左眼の上を行くは斬疵か、紫ばめる唇の下に、三寸ばかり掠られて、朱ににじむ眼。薄青む面色。雪一口毎に呼吸せはし。

やがて水際にゐざり寄り、氷をおし破りて、丸く碎けたる處へ首をさし伸べ、わが顔を水鏡に寫して、暫く見詰めたりしが、やがて面の疵洗ひ、四邊を睨め廻して、苦しき肩呼吸、雪に深く弓手をついて、半身起ち上がる。……その時、右の股へ、……誰、……槍を草摺の外れより、……骨をも貫いたか、あゝつと叫びあへず、吉則の二尺八寸、……閃く、……丁と切拂ふ。槍は蛭巻より斜に切れ、その餘勢に二三歩前へよろめく敵を……見れば鐵地の半首……小具足身輕に出で立つ雑兵、手に残る槍の柄からり投棄て、腰刀引抜き、眞額に振翳し、二つになれよの身構へ。

吉則
昔の刀匠の名。
半首



若武者はたと睨めつけ、

「下郎、推参な。」

彼は一言も返さず、矢聲高く斬りおろす。二三尺飛びすさつて、股を穿つ槍の汐首ぬき取り、敵の胸板めがけて投げつくれば、體を捻つて、なほ斬りかゝる。

「もの／＼しや。口には言へども、初の深手に苦しき進退、片膝ついたまゝ、斬込み受流し、十二三合渡り合はず。虎は病めども、虎、苛つてつけ入る。若武者の切先を受損じて、敵は右の肩上の外れをしたゝか割附けられ、しどろになつて倒れかゝるを、すかさず二の太刀に細首うち落せば、氣のゆるみか、我にもあらでどうと坐し、はつと呼吸。時しもあれ、耳もと近く、手綱烈しくかい繰る銜の音。すはや敵よ、……身方か。身方ならば、此處に潔く腹搔つさばいて首級を彼に頼まばや。我とても生くべき命

にあらず、敵ならば、行歩は自在ならずとも、今生の思ひ出、快く斬結んで美名を彼の口より擧ぐべし。

「來れ何者。」

太刀の血を雪にすり拭ひ、遅しと待つところへ、青總かけたる白栗毛の、逞しき逸物の蹄に雪を煙らし、驀地に驅ける武者一騎。鎧は褐色緘、目深に頂くは同じ毛の六十四間の星兜。獅子頭の前立物に、金の鍬形を聳やかして、左脇に青貝摺りたる二間柄の大笹穂を横たへし騎馬の姿。——あつばれ物慣れたる武者よ。此處に人ありと心づかずや、驅抜けて通る後ろより、「これは浦松小四郎守眞なり。手疵少々負ひたれど、勇氣は少しも衰へず。御不足ながら御相手仕らん。いかに。」と聲をかくれば、かれ俄に駒首引廻らし、その足を留めて、目廂の陰より守眞の顔をとくと見、



此の世の名聲

修練 威光 驍馬 諸首 鐵 王 藤 松

指物

慶賀

「やあ、小四郎か。言ふは誰。守眞深く怪しみ、兜の内を窺ひながら、

如何にも拙者は小四郎守眞貴殿は……。」

問はれて、背に閃く指物の旗の端を取つて、守眞に示す。見れば、緋羅紗に遠山左近之助武重と白し。

「やあ、伯父上か。涙聲。

「小四郎、珍らしや。これも涙聲。いそがしく馬をおり、銜とつて進み寄れば、守眞恭しく一禮して、

「その後は御健勝で祝著に存じます。」

「御身も達者で。言ひかけて眉を擧め、守眞の姿をと見かう見。大分の手疵。面色と言ひ、呼吸と言ひ、氣遣はしい。重手では御座らぬか。」

戦場の習として、親は子を棄て、子は親を思ふ暇なく、人の心は

カブツヤ
上差矢

剛に流れ、寄手の松明に目さまし、胡籬枕に寐ぬるまで、やさしき言葉はかけられも、かけもせずかゝる時なれば、金瘡の血を嘗る大將の慈悲の舌には、惜しむべき一命も物かは、棄つる氣になるぞかし。人と見れば、討つか、討たるゝかの中に、思ひも寄らず逢ふは伯父、聞くは濫言、ばらゝとたばしる涙は草摺の血を洗ふ。

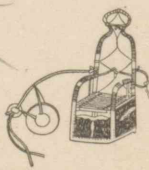
「は、はい。あとは無く、さしうつむく。武重は唐綾の燧袋より金瘡の薬とり出し、舌頭に濕して指に載せ、

「さ、さ、小四郎、薬……面を……。」

守眞會釋しつゝ、顔をさし出せば、武重その頤に手をかけ、疵口に薬を塗りながら、

「ほう、これは……どうぢや、痛むか。うむ、左程痛まぬ……外に矢疵でも受けられたか。」

胡籬



箆
三十四本
大巾鳥
征矢
金
矢

「は、左の籠手と腰の番ひ、外に一個處高紐のあたりへ、強く横矢を受けました。」

「左様か。」と聲をうるませ、弾丸疵は……。」

「幸ひに弾丸は受けたやうに覺えませぬ。」

「弾丸は受けぬ……それはめでたい……ひどく震へる様子だが、どう致した。」

「只今此處で……。」と、倒れたる雑兵を指し、此奴に不意に右の太股へ槍を……。」

「此奴に……仕留められたのか。」

勇氣を心に響むる笑顔守眞も寂しげに笑を含む。

「細首打落してくれました。」

「ふむ。あつばれ。」と、守眞が亂髪に降りかゝる雪を拂ひつゝ、痛手にしをるゝ姿を見て、ひそかに涙を押拭ふ。響く……突然……

…弾丸の音……釣瓶はなし。守眞むくと首をあげて、其方の空を睨め、振向く顔と武重の顔。

「計らざる處にて見參致し、今はの際の喜……。」

「なに、今はの際。」

「は、これより戰場へ引返し、花々しく斬り死致す所存でございます。」

「好い所存、好い覺悟。さりながら、御身が勢は無慙な敗軍。あれ、あれ、身方が揚げる鯨波。今御身が取つて返し、一働きとはあつばれ……義の潔しとするところなれど、果卵を以て大石の臂へ、御身一人、次ぐ身方もなく、群る敵へ斬込んで、三面六臂の目ざましい働きをしたところが、急に身方の勝利になるではなし、言はば犬死……まして進退も不自由な重手を受けて居ながら、餘りと言へば無謀な料簡。如何なる怪我で、名もなき下郎に」

ナンノテ、ゴトヘモナク、

首級を揚げらるゝやも知れ難い。合戦は今日一日に限るではなし、十分手當をして、英氣を養つた其の上で、存分の働きをしやれ。何時でも一命捨てらるゝ。一先づ拙者の館へ立越え、ゆるゆる手疵の療治を……なう小四郎。」

實意を籠めて説きすゝむれど、忠義一徹の守眞、武重を恨めしげに見遣り、

「お言葉とも思ひませぬ。死すべき時に死せざれば、死ぬに増したる恥辱を受くると申すに……武運拙くして身方の敗軍、たとひ手疵を負へばとて、戰場を脱けて此處等を徘徊致すは、我ながら快く存じませぬ。まして……卑怯者と敵身方の者の思はくも恥づかしう御座るに、此處を落ちて館へ來い、ゆるゆる療治せよ……御深切は御深切なれど、伯父上、平常とは違ひます……名を惜しみ義を重んずる武士に……それが仰せ下

さるゝお言葉か。名を惜しみ義を重んずる武士の……それが御意見か。餘りと言へば女々しいお言葉。この小四郎は命を惜しむ腰拔者と、おさげすみの上の御戲言で御座りますか。伯父上、亡父と積年御入魂の御馴染、且はその遺言を以て、わが子と思し召して御意見下さるならば、何故に潔く討死せよとは仰せられて下さりませぬ。却つて御厚志を恨めしく存じます。」
當然の理に責められて、武重は槍を突き、鞍にもたれ、首を下げて無言なり。返事如何にと流し目に見やる守眞、かれ一言の答なければ、苛立ちて、

「伯父上……さらばで御座ります。」
何を思案の武重、言葉は耳に入らざるか、體さへ顔さへ少しも動かさず、鬢の雪に身を顛はせて、馬のみぞ高く嘶く。

(尾崎紅葉「尾崎紅葉集」)

尾崎紅葉 名は徳太郎。文學者。東京の人。明治三十六年歿、年三十七。

期主

八空行く雁

新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。

年立ちかへり 養和元(一八四一)年。

母 河津祐泰の死後、曾我祐信に再嫁す。

ある夕ぐれ、箱王は母の膝の上にたはぶれながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛は何國にましますぞや。往きてをがみ奉らばや。母御前、いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたる來し方も、今さら思ひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母泣く／＼のたまひけるは、「あの曾我殿こそ、おのれ等が父にてあれ。」と、心づよく語らひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。

曾我殿 太郎祐信をいふ。祐信は頼朝の臣。正治二(一一八六〇)年歿。

箱王かさねて申しけるは、「父御前は、まことやらむ、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一藤

工藤 左衛門尉祐經。頼朝の臣。建久四年(一一八五三)年歿。

(一八五三)年歿、年三十八。

鎌倉殿 源頼朝。

此の里 神奈川縣足柄下郡曾我中村。

とやらに射られ、死に給ひぬ。」と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時、鎌倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。われらをも殺さむとや思ふらむ。われらが此の里にありと知らずや。過ぐらむ。など、おとなしく語りければ、母より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。かくて、夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月、隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出て遊びゐたるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿、空を飛ぶ翼も皆別の翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。物いはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫に生まれながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿はまことの父にてましますまぬこそ悲しけれ。われらが父を

ば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓・矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射あり



繪本曾我物語挿畫

きなむ。われらより幼きものにて、馬鞍・弓・矢をもて、物を射ありくことの羨ましきよ。此等の事ども思ひつゞくれば、いつより今宵は父御前の戀ひしくおはしますぞや。とて、袖に顔をさし入れて、さめざめと泣きければ、弟もこざかしく顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、

「あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上郎達、夜も更けぬるにさやうにてはおはするぞ。とくく入らせ給へ。」と、怖ろしげ

にいひければ、二人のものは門外へ逃げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにつけり。

或時、兄弟は竹の小弓に、薄矧すきはの小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人はたち向かひ、あなたこなたへ射通して、一萬箱王に申しけるは、

「われらもいつか成長し、和殿十三われは十五にだにもなるならば、如何ならむ野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさしあひて射取りて、ともかくにもなりなむ。和殿も弓よく射習ひ給へ。われも射習はむ。弓矢は男の一の能にあるなるぞ。」といひければ、弟もうちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと、人々思ひけり。

一萬が乳母、このよしを聞知りて、大いに驚きて、母にかくと申しければ、母も大いに仰天し、二人の子どもをよび寄せ、泣く

泣く語られけるは、

「まことか、おのれ等が、さも怖ろしき謀叛を起さむと議しあふなるは、もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りしゆゑに、御敵となつて、先年伊東の館に於て失はれ給ひぬ。おのれ等かゝる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。その時、千度百度悲しむともかなふべきか。その上、汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申してとゞまりたり。そのゆゑは、鎌倉殿、石橋山の合戦にうち負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と、二人心をあはせて助け奉りしゆゑに、駿河國八郡の大名になされし、その御恩を皆返しまゐらせて、『二人の幼き子どもを助けて給はらむ。』と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、『それほどの志なら

伊東入道 名は祐親。伊豆國の人。壽永元（一八四二）年歿。千鶴 母は祐親の女なり。松河が淵 静岡縣田方郡伊東町にあり。左衛門尉 祐經をさす。

石橋山 治承四（一八四〇）年八月の合戦。石橋山は神奈川縣足柄下郡片浦村にあり。土肥 石橋山の南。神奈川縣足柄下郡吉濱村の邊なるべし。梶原景時 頼朝の寵臣。正治二（一一八

六〇）年歿。

ば、二人の子供、祐信に預くるぞ。』と仰せられけるゆゑにこそ、汝等も安穩にて今まで希有の命を保ちたるなれ。それにつきても、曾我殿の芳恩をば、生々世々にも報じ盡くすべきか。鳥類畜類にても恩を知るところ聞け。況や、汝等人倫に於てをや。然るを、却つて曾我殿に歎を與へむこと、返すくも口惜しかるべし。その恩を報ぜむと思はば、速かに謀叛をとゞむべし。』と、口説きたてて誠められければ、二人の子ども、目と目とを見あはせ、顔うち赤めて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬところにては内々談議しけれども、人目にあらはれては語りあふこともなし。母も内々怖ろしき者どもの心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせむと思はれけり。 （曾我物語）

曾我物語 十卷。曾我兄弟のことを主として記せる書。作者未詳。

九 故郷の花

書取

薩摩守忠度は何處よりか歸られたりけむ侍五騎童一人我が身共に混甲七騎取つて返し五條三位俊成卿の許におはし見給へば門戸を閉ぢて開かず忠度と名告り給へば落人還り來れりとしてその内騒ぎあへり薩摩守急ぎ馬より飛んでおり自ら高らかに申されけるは「これは三位殿に申すべき事ありて忠度が參つて候。たとひ門をば開けられずともこの際まで立寄り給へ申すべき事の候」と申されたりければ俊成卿「その人ならば苦しがるまじ開けて入れ申せ」とて門を開けて對面ありけり事の體何となう物あはれなり薩摩守申されけるは「先年申し承つてより後はゆめ々疎略を存せずとは申しながらこの二三箇年は京都の騒國々の亂出て來剩へ當家の

薩摩守忠度 平忠盛の子。和歌を藤原俊成に學ぶ。壽永三(一八四四)年戦歿す。年四十一。俊成卿 藤原氏。歌人。皇太后宮大夫。正三位に至る。元久元(一八六四)年歿。年九十一。



(筆三月形尾) 離別前門

身の上に罷りなつて候へば、常に参り寄る事も候はず。君既に
帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命今日はや盡きはて候。それ
につき候うては、撰集の御沙汰あるべき由承つて候ひしほど
に、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らうと存じ候ひつる
に、かゝる世の亂出で来て、その沙汰なく候條、唯一身の歎と存
じ候。この後、世靜まつて撰集の御沙汰候はば、これに候卷物の
中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩を蒙つて、草の蔭
にても嬉しと存じ候はば、遠き御守とこそなり参らせ候はむ
ずれ。とて、日來詠み置かれたる歌どもの中にて秀歌と覺しき
を百餘首集められたりける卷物を、今はとて打立たれける時
これを取つて持たれたりけるを、鑑の引合せより取出でて俊
成卿に奉らる。三位これを開いて見給ひて、かゝる忘形見ども
を賜はり候上は、ゆめ／＼疎略を存ずまじう候。さても唯今の

君 安徳天皇を申す。

御渡りこそ情も深う哀も殊にすぐれて、感涙抑へ難うこそ候へ。と宣へば、薩摩守、骸を野山に曝さば曝せ。憂名を西海の波に流さば流せ。今はうき世に思ひ置くことなし。さらば暇申す。とて馬に打乗り甲の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位後ろを遙かに見送つて立たれたれば、忠度の聲と覺しく、前途程遠馳思於雁山夕雲と、高らかに口ずさみ給へば、俊成卿もいと哀に覺えて、涙を抑へて入り給ひぬ。

その後、世静まつて千載集を撰せられけるに、忠度のありし有様、言ひおきし言の葉、今更思ひ出でて哀なりけり。件の巻物の中にさりぬべき歌いくらもありけれども、その身勅勤の人なれば、名字をば顯されず、『故郷花』と言ふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ『讀人知らず』と入れられたる。

さ々なみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山

櫻かな

その身朝敵となりぬる上は、仔細に及ばずといひながら、うらめしかりし事どもなり。(平家物語)

保元この方天下の榮華を盡くしたる花の都を、燒野の原と顧みて、末も煙の浪路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣束帶の身にも、今は黒金の衣を伸べたれど、誰かは詠歌の餘哀に、狂れて弓矢の譽を勵むべき。さても棄てがたき命や。今こそは世にも人にも憂かりけれ。流石に偲ばる、昔の様の夢に入るをばいかにせん。翠華搖々として西に向かへば、秋風到る處野に満てり。嗚呼、きのふは東關のもとに轡を鳴らして十萬騎、けふは西海の波に纜を解きて七千餘人、行方の空は分かねども、身に泌む秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。(高山樗牛「樗牛全集」)

前途程遠云々、「前途程遠、馳思於雁山之暮雲。後會期遙、雲纏於鴻臚之曉淚。」(和漢朗詠集)雁山は支那の長安より胡地に越ゆる路に當る山。千載集二十卷。藤原俊成が壽永三年二月に後白河上皇の勅を受けて、後鳥羽天皇の文治三(一八四七年)九月に撰進せる和歌集。

平家物語 十二卷。主として平家一門興亡の跡を記せる書。作者未詳。保元 後白河天皇の御宇、一八一六一一八一九年。

高山樗牛 名は林次郎。文學博士。山形縣の人。東京帝國大學卒業。明治三十五年歿、年三十四。

一〇 鶴 越

七日の曉、九郎義經は鷲尾を先陣として、一の谷の後ろ、鶴越へぞ向かひける。頃は二月の初なり。霞の衣立てへだて、緑をそふる山の端に、白雲絶えつゝ、聳えつゝ、先づ咲く花かとあやまたる。未だ歩みなれぬ山路なり、行末はそこ知らねども、行く馬の足に任せつゝ、各、先にと進みけり。まだ仄暗きほどなり、道にはなづみけれども、矢合せ時を定めれば、明るるを待つに及ばずして、谷に下り峯に登り、引懸け引懸け打ちけるに、一の谷の後ろに篠が谷といふ處に人の音しければ、押寄せて、何者ぞ。と問ふ。名乗る事はなくて、散々に射ければ、此奴ばらは平家の雑兵にこそあるらめ。一々に搦め捕つて頸を切り、軍神に祭れ。とて、源氏も散々に射ければ、こゝにて平家多く討たれにけり。

七日 壽永三(一八四四)年二月。鷲尾 鷲尾庄司武久の子。幼名熊王。義經に従ひて三郎義久と名のり、鶴越の道案内をなす。後に義經と共に衣川に戦死す。
一の谷 神戸市須磨區。その北方に鶴越あり。

仄暗
引懸

其の後鷲尾尋承にて下り上り打つほどに、辰の半ばに鶴越一の谷の上、鉢伏礮の途といふ處に打登る。兵共遙かにさしのぞきて谷を見れば、軍陣には楯を並べ突き、士卒は矢束をくつろげたり。前は海、後ろは山波も嵐も音合はせ、左は須磨、右は明石、月の光も優ならむ。追手の戦は半ばと見えたり。喚き叫ぶ聲、射ちがふ鏑の音、山を穿ち谷を響かし、赤旗、赤符立並びて、春風に靡く有様は、劫火の地を焼くらむも、かくやと覺えたり。時既によくしたり、追手に力を合はせむとて見おろせば、げに上七八段は小石まじりの白砂なり。馬の足停るべきやうなし。徒歩にても馬にても落すべき處にあらず。さればとてあるべき事ならねば、只今まで乗りたりける大鹿毛には、佐藤三郎兵衛を乗せ、我が身は大夫といふ馬に乗替へて、谷へ打向け給ひ、鹿

佐藤三郎兵衛 義經の臣。名は繼信。屋島の戦に義經に代つて死す。

の通ひ路は馬の馬場ぞ各落せ落せ。」と勧め給ふ。兵共我も我もと馬をば谷へ引向けて、心は先陣とはやれども、さすがいぶせき崖なれば、手綱を控へてやすらへば、馬も恐れて退きけり。互に顔と顔とを見合はせて、いづくを落すべしとも見えず。テヨイオオストオコラ見はらヌットオ出キナクツク

軍將宣ひけるは、「一は馬の落ちやうをも見、一は源平の占形なるべし。」とて、葦毛の馬に白覆輪、白ければ白旗に准へて源氏とし、鹿毛の馬に黄覆輪、赤ければ赤旗に准へて平氏とて追ひおろす。各木の間にてこれを見上ぐるに、七八段は小石交りの白砂なれば、まろぶともなく落つるともなく下りつゝ、巖の上にぞ落著きたるや、暫くあつて、巖の上よりまろび下り、越中前司盛俊が假屋の後ろに落著きて、源氏の馬は這起きつゝ、身振ひして峯の方を守り、二聲嘶へ、篠草はみて立ちたり。平家の馬は身を打損じ、臥して再び起きざりけり。城中にはこれを見

盛俊 平盛國の子。
越前守たり。一の
谷の戦に戦死す。

て、敵の寄すればこそ鞍置く馬は下るらめとて、騒ぎ迷ひけるところに、御曹司は、源氏の占形こそめでたけれ。平家の軍、左様あるべし。人だに心得て落すならば、過さらにあるまじ。落せ落せ。」と宣へども、我だに恐れて落さねば、人も恐れてえ落さず。白旗五十旒ばかり梢に打立てて宣ひけるは、「守つて時を移すべきにあらず。馬に乗るには、一つ心、二つ手綱、三に鞭、四に鎧といひて、四の義あれども、所詮心を持ちて乗るものぞ。若き殿原は見も習ひ乗りも習へ。義経が馬の立てやうを本にせよ。」とて、眞逆に引向け、續け、續け。」と下知しつゝ、馬の尻足引敷かせて、流れ落ちに下したり。三千餘騎の兵共大將軍に續けとて、白旗三十旒、城の内へ指覆ひ、轡並べて手綱かい繰り、同じやうに尻足敷かせて、さと落して壇の上にぞ落ちとままる。カキヤト

それより底を指しのぞいて見れば、石巖峙つて苔蒸せり。刀

の刃に草覆へるやうなれば、いといふせき上、二十丈もやあらむと見え渡る下へ落すべきやうもなし。上へ上がるべき便りもなし。互に固唾を呑みて思ひ煩へるところに、三浦黨に佐原十郎義連進み出でて、我等甲斐・信濃へ越えて、狩し鷹使ふ時は、兎一つ起いても鳥一つ立てても、傍輩に見落されじと思ふには、これに劣る處やある。義連先陣仕らむ。とて、手綱かい繰り、**鎧**踏張り、只一騎眞先かけて落す。御曹司これを見給ひて、義連討たすな。續け者共、者共。と下知して、我が身も續きて落されけり。

畠山は赤緘の鎧に、護田鳥毛の矢負ひ、三日月といふ栗毛の馬の太く逞しきに乗りたりけり。此の馬**鞭打**に三日の月ほどなる月影のありければ名を得たり。壇の上にて馬よりおり、指しのぞいて申しけるは、爰は大事の悪處、馬まろばしては悪し

三浦黨 今の神奈川
縣三浦郡に居りし
一黨。
佐原十郎 頼朝の臣。
義經に従ひて平氏
を討つ。

畠山 名は重忠。武
藏國の人。頼朝に
重用せらる。元久
二(一八六五)年北
條時政に憎まれて
戦死す。年四十二。
護田鳥毛 護田鳥は
護水鳥とも書く。
五位階に似たりと

いふ。毛は借字に
て斑(ふ)の音便な
り。鶯の羽の薄黒
き斑のあるもの。
矢羽に用ふ。

かるべし。親にかゝる時、子にかゝる折といふ事あり。今日は馬を勞らむ。とて、手綱腹帶縫合はせて、七寸に餘りて大きに太き馬を十文字に引きからげて、鎧の上にかき負ひて、椎の木の手すだち一本**振切り**杖につき、巖の迫りをしづくとこそ下りけれ。東八箇國に大力とはいひけれども、只今かゝる**振舞**人倫にはあらず、誠に鬼神の業とぞ、上下舌を振ひける。畠山は、此の岩石に馬損じては不便なり。日頃は汝にかゝりき。今日は汝をはぐくまむ。といひける。情深しと覺えたり。

其の後三千餘騎、手綱かい繰り、鎧踏張り、手を握り目を塞ぎ、馬に任せ人に随つて劣らじと落しけるに、然るべき八幡大菩薩の御計ひにや、馬も人も損ぜざりけるこそ不思議なれ。落しも果てず、白旗三十**旒**さと捧げ、三千餘騎同時に**関**を造る。山彦答へて夥し。平家の**城郭**に亂れ入りて、豎様横様**蜘蛛**手十文字

に馳廻り、喚き叫んで戦ひければ、城中には東西の城戸口ばかりこそ防ぎけれ、さしも恐ろしき巖石より、敵寄すべしとも思はざりければ、打延べて左右の城戸口の弱からむ時軍せむとて、鎧物具脱置きて、小具足ばかりにて居たるところへ、はつと寄せ、どつと鬨を造りたれば、弓矢を取り馬に乗る隙を失ひ、あわて迷ひ、味方の兵も皆敵に見えければ、適馬に乗り弓矢を番ひける者も、味方討ちに討殺され斬殺されて、上になり下になつて、心も身にそはず、度を失ひ騒ぎふためきける有様は、小魚の溜り水に集り、宿鳥の枝を争ふに異ならず。

御曹司下、知し給ひけるは、城郭廣博なり、賊徒數を知らず、多く官軍を亡さむこと最も不便なり、火を放て、と宣へば、武藏坊辨慶、屋形に打入り、假屋に火をさす。折ふし西の風烈しくして、猛火城の上へ吹覆ふ。平家の軍兵煙に咽び火に責められて、今

武藏坊辨慶 熊野別當辨正の子。幼名鬼若。比叡山の西塔に住し武藏坊と稱す。義經に従ひて戦功あり、衣川

に戦死す。

は敵を防ぐに及ばず、取る物も取りあへず、濱の汀に逃出てつ、海の藻鹽に馳入つて、船に乗らむとぞ迷ひける。助船も多くありけれども、そも然るべき人々をこそ乗せけれ、次々の者共をば乗せざりければ、乗らむ乗せじとするほどに、多く海にぞ沈みける。猛火の煙、蹴立ての灰、逃去る道も見えざりければ、皆敵にぞ討たれける。されば助るは稀に、亡ぶるは多し。無慙といふも愚かなり。(源平盛衰記)

盛衰記の作者は鴨越を落すといふ事は、到底人間わざではできぬ、常識的にはいかぬものと見たのである。で、大將義經の上、その筆を集中して、理が非でも通す、——一旦かうと思ひこんだ以上は、どうでも通すぞといふ、義經のその意氣を見せ、その意氣に勵まされて、全軍が落しおほせるといふやうに、

敘事の筆をすゝめたのである。(内海弘藏) カキトリ

内海弘藏 國文學者。神奈川縣の人。東京帝國大學卒業。明治大學教授。

源平盛衰記 四十八卷。源平二氏の興亡盛衰のさまを記述せる物語。作者未詳。

一一 歌がたり

歌主やたれ

殿もりの伴のみやつこころあらばこの春ばかり朝
きよめすな

この歌、一たび打ちあぐる時は春風駘蕩として落花の撩亂
たるさま目の前に浮かび、再び打ちあぐる時は、衣冠したる上
達部の高欄のもとに佇みて吟詠し給へる面影見えて、恰も一
幅の畫圖の如く、いみじとも面白しともいはん方なくなんか
ばかりの名歌にして、その作者の一定せぬこそ本意なけれ。拾
遺集には源公忠の詠とし、今昔物語には藤原敦忠の作として
一條の物語を載せたり。三十六人集を閲するに、公忠の集にあ
りて、敦忠のにはなし。かの「行きやらで山路暮らしつ」といふ歌

拾遺集 二十卷。花
山院御選とも藤原
公任選ともいふ。
源公忠 歌人。平安
朝初期の人。
今昔物語 源隆國選。
異本多くして卷數
一定せず。

も、この公忠が詠めるなり。紀貫之が晩年の朋友として、贈答の
歌の頻りなりしを見て、さる名歌詠むまじきほどの人にも
あらじ。殊に、拾遺集は勅選の集なれば、公忠のものと定むべき
が如し。敦忠も上手なりしかども、猶これは今昔物語の傳聞の
誤ならん。

蘆庵の松

小澤蘆庵翁は、なみ／＼ならぬ物數奇の人と見えたり。しか
も、その物のために志を喪はざりける事は、彼の古琴を購ひ得
て、みづから修理を加へて、いと快く音の出でたるを、人の譽め
けるまゝに、惜しげもなく與へしをもて、思ひ合はずべし。その
岡崎の里に住まひしける頃、門にも、庭にも、わきてこれぞとい
ふべきほどの草木もなかりけるが、只ひと木、亭々として軒近
く立てる松の木は、わざ／＼紀州和歌の浦より、人を傭ひて移

岡崎 京都市左京區
の一部。

藤原敦忠 歌人。平
安朝初期の人。
三十六人集 十五卷。
三十六人の歌を集
めたるもの。藤原
公任の選。
行きやらで「行きや
らで山路くらしつ
時鳥いま一聲の聞
かまほしさに」(源
公忠)
紀貫之 歌人。古今
集選者の一人。天
慶九(一六〇六)年
歿。
小澤蘆庵 名は玄中。
歌人。尾張國の人。
享和元(二四六一)
年歿、年七十九。

し植ゑたるなりとぞ。米の代を拂へば、囊の中に物ひとつも無かりきといふ清貧なる翁が、一代の奢なるべし。まことの風流といふものは、かゝる境に籠りたるにやあらん。この松ぞかし、本居宣長が、寛政五年に上京せし時、翁が庵を訪ひて、
おもはずも都ながらに和歌の浦の木高き松をけふ見
つるかも

本居宣長 國學者。伊勢國の人。國學四大人の一人。享和元年歿、年七十二。

と、主人のみやびを思ひ寄せて詠めりけるは、翁もこの言の葉を松の面目と嬉しみて、末遠くこの庵に残してんと思はれる序に、宣長に、

春毎に松はみどりも添へてけり年のみ高きわれやな
になる

と詠みおくりて、飽くまで謙遜したるところ、いとも奥ゆかしき限りになん。

翻案

秋玉山が澱河夜泊の詩、

秋玉山 秋山玉山をいふ。

蓬窓雨蕭々。歸思滿烟渚。

一聲澱河曉。杜鵑不知處。

佳作に庶幾し。轉結殊に餘韻遠長きを覺ゆ。一旦これを原歌たる拾遺集の、

いづかたに鳴きて行くらむ時鳥淀のわたりのまだ夜
深きに

いづかたに見の歌。壬生忠

に比するに至りては、花の傍の深山木なり。素より神韻縹渺たる點に於て劣り、起承また蛇足に屬して猥雜を免れず。されど副士定が、管根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井河の民謠を譯して、

關山八十里。雖險猶有路。

副士定 副島士定をいふ。

不似大堰河 渺漫動難渡

といへるに比すれば、その巧拙到底同日の論にあらざるを見る。紀友則が歌、

さみだれに物おもひをれば時鳥夜深く鳴きていづち
行くらむ

梅雨の候といひ、夜深といひ、杜鵑血に泣く聲といひ、いづれか一として悲愴の感を惹起す媒介ならざるべき。況や、湊合して一片の心頭に落下し來らん時、ために胸は千々に碎け、腸は九廻轉すべきなり。拾遺集の歌、これを藍本として、藍よりも更に青き絶唱、殆ど神品に入るものか。後世杜鵑の詠作多し。ひとり後徳大寺左大臣が、時鳥鳴きつる方をながむればの一詠や、淀のわたりの遺響を嗣ぐに足らん。(金子元臣)

紀友則 歌人。古今集選者の一人。さみだれに 古今集に見ゆ。

後徳大寺 藤原實定。建久二(八五二)年歿、年五十三。時鳥 下の句は、ただ有明の月ぞ残れる。金子元臣 國文學者。東京の人。御歌所寄人。

二 玉かつま鈔

皇國の事知らぬ儒者

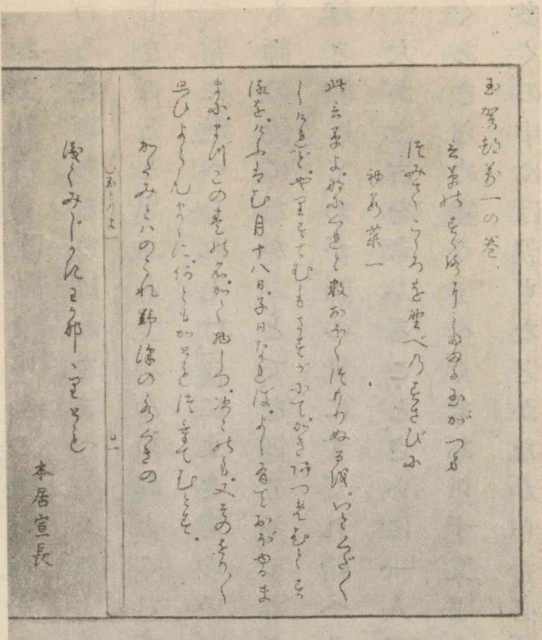
儒者に皇國の事を問ふには、知らずといひて恥とせず、漢國の事を問ふに、知らずといふをばいたく恥とおもひて、知らぬ事をも知り顔にいひまぎらはす。こはよろづを漢めかさむとするあまりに、その身をも漢人めかし、皇國をばよその國のごともてなさむとするなるべし。されどなほ漢人にはあらず皇國人なるに、儒者とあらむもののおのが國のこと知らであるべきわざかは。但し皇國の人に對ひて、さあらむも漢人めきてよかんめれども、もし漢國人の問ひたらむには、我はそなたの國の事はよく知れれども、わが國の事は知らず。とは、さすがにえいひたらじをや。若しさもいひたらむには、おのが國の事をだ

に知らぬ儒者の、いかでか人の國の事をば知るべき」とて、手をうちていたく笑ひつべし。

古き書どものこと

珍らしき書を得たらむには、親しきも疎きも、おなじ志ならむ人には、かたみにやすく貸して、見せもし、寫させもして、世にひろくせまほしきわざなるを、人には見せず、おのれひとり見てほこらむとするは、いと心ぎたなく、物まなぶ人のあるまじきことなり。

但し得難き書を遠く便りあしき國などへ貸しやりたるに、あるは道のほどにてはふれ失せ、あるはその人俄になくなりなどもして、つひにその書かへらずなることあるは、いと心うきわざなり。されば、遠きさかひより借りたらむ書は、道のほどのことをもよくしたゝめ、又、人の命は俄なることもはかり難きものにしあれば、なからむ後にもはふらさず、たしかに返すべくおきておくべきわざなり。



本居宣長筆蹟
すべて人の書を借りたらむには、すみやかに返すべきわざなるを、久しくとどめおくは心なし。さるは書のみにもあらず、人に借りたる物は何

も同じことなる内に、いかなればにか、書は殊に用なくなりて後、なほざりにうちすておきて、久しく返さぬ人の上に多き

玉賀都萬一の巻
言草のすゞろに
たまる玉がつま
つみてこゝろを
野べのすさびに
初若菜一
此言草よ、なにく
れと敷おほくつも
りぬるを、いとく
だくしけれど、
やりすてむもさす
がにて、かきあつ
めむとするを、け
ふはむ月十八日、
子日なれば、よし
有ておぼゆるまゝ
に、まづこの巻の
名、かく物しつ、
次々のも、又その
をり、思ひよら
んまゝに、何とも
かともつけてむと
す。
かたみとはのこ
れ野澤の水ぐき
の淺くみじかき
わかななりとも
本居宣長

ものぞかし。

師の説に泥まざること

おのれ古典いにしへのを解とくに、師の説ととたがへること多く、師の説の

わろき事あるをばわきまへいふことも多かるをいとあるま

じきことと思ふ人多かんめれど、これすなはちわが師の心に

て、常に教へられしは、後によき考のいできたらむには、必ずし

も、師の説にたがふとて、な憚りそ。となむ教へられし。こはいと

尊き教にて、わが師の世にすぐれ給へる一つなり。

大かた古を考ふること、さらに一人二人の力もて、ことごとく

くあきらめ盡くすべくもあらず。又よき人の説ならむからに、

多くの中には誤もなどかなからむ。必ずわろきこともまじら

ではえあらず。そのおのが心には、今は古の意ことごとく明か

なり、これをおきてはあるべくもあらずと思ひ定めたること

も、思の外に、又人の異なるよき考もいづくるわざなり。あまた

の手をすこ経るまに、さきのうへをなほよく考へきはむ

るからに、つぎにくはしくなりもてゆくわざなれば、師の

説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきをい

はず、ひたぶるに古きを守るは、學問の道にはいふかひなきわ

ざなり。

又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いとあもか

しこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その説にまどひ

て、長くよきを知ることなし。師の説なりとして、わろきを知り

ながらいはず、つゝみ隠して、よさまにつくろひをらむはたゞ

師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。宣長は道をを尊み古を思

ひて、ひたぶるに道の明かならむことを思ひ、古のことの明か

ならむことをむねと思ふがゆゑに、わたくしに師を尊むこと

わりの缺けむことをば、えしも願みざることあるを、なほわろしと譏らむ人は譏りてよ。そはせむかたなし。われは人に譏られじ、よき人にならむとて、道をまげ古の意をまげて、さてあるわざはえせずなむ。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。

わが教へし子に誠めおくやう
われに従ひて物まなばむ輩も、わが後に又よき考のいできたらむには、かならずわが説にななづみそ。わがあしきゆゑをいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道をあきらかにせむとなれば、とにもかくにも道をあきらかにせむぞ、われを用ふるにはありける。道を思はで、いたづらにわれを尊まむは、わが心にあらざるぞかし。

さしこえて難きを明むること

物まなぶともがら、物知り人にあひて物問ふに、ともすれば、まづ古書の中にも、よに難きこととして誰も説き得ぬふしをえり出でて問ふならひなり。難きことをまづ明めまほしく思ふも學者のなべての心なれども、然らば易きことどもは皆よく明め知れるかと試むれば、いと易きことどもをだにいまだえよくもわきまへず。さるものさしこえてまづ難きふしを明めむとするは、いとあぢきなきわざなり。よく聞えたりと思ひて、心もとゞめぬに、思の外なるひが心得の多かるものなれば、まづた易き事を幾度もかへさひ考へ、問ひも明めて、よく得たらむ後にこそ、難きふしをば思ひかくべきわざなれ。

書うつすに、同じくだりのうち、あるは並べるくだりなどに、同じ詞のあるときは、見まがへて、そのあひだなる詞どもを

うつし洩らすこと、常によくあるわざなり。又一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへしては、そのあひだ一ひらを、みながら落すこともあり。これらつねに心すべきわざなり。又よく似て、見まがへ易きもじなどは、ことにまがふまじく、たしかに書くべきなり。これは寫しがきのみにもあらず、おほかた物書くに心得べき事ぞ。十月十四日。

書讀む事のたとへ

須賀直見がいひしは、廣く大きな書を讀むは、長き旅路を行くが如し。おもしろからぬ處も多かるを、經行きては又面白く目覺むる心地する。浦山にも到るなり。又、足強き人は早く、弱きは行くこと遅きも、よく似たり。とぞいひける。をかしき譬なりかし。

田舎に古の雅言の残れること

すべて田舎には古の言の残れる多し。殊に遠き國人のいふ言の中には、おもしろき言どもぞまじれる。おのれ年頃心をつけて、遠き國人のとぶらひ來たるには、必ずその國の詞をとひ聞きもし、その人のいふ言をも心とめて聞きもするを、なほ國々の詞どもを普く聞きあつめなば、いかにもおもしろきこと多からむ。

近頃

近き頃、肥後の國人の來たるが、いふ言を聞けば、世に見える。「聞えるなどいふたぐひを、見ゆる」「聞ゆるなどぞいふなる。こは今の世には絶えて聞かぬ雅びたる言葉づかひなるを、その國にてはなべていふにやと聞きければ、ひたぶるの賤山がつかみを見ゆる」「聞ゆる」「訝ゆるなどやうにいふを、すこし言葉をもつくろふほどの者は、多くは「見える」「聞える」とやうにいふなりとぞ語りける。そはなかな、今の世のいやしきいひざまなる

一途

須賀直見 伊勢國の人。本居宣長の門人。

をなべて國々の人のいふから、そをよき事と心得たるなんめ
 り。いづれの國にても賤山がつのいふ言はよこなまりながら
 も、多く昔の言葉をいひ傳へたるを、人しげく賑はしき里など
 は、他國人も入交り、都の人なども事にふれて來通ひなどする
 ほどに、おのづからこゝかしこの言葉を聞きならひては、おの
 れもことえりして、なまさかしき今様にうつり易くて、昔さま
 に遠く、なか／＼いやしくなむなりもて行くめるまことや、同
 じ肥後の國の又の人のいへる、かの國にて、ひきがへるといふ
 ものを、たんがくといふなるは、古のたにぐくのよこなまりな
 るべくおぼゆと語りしは、誠にさもあるべし。
 此のたぐひのこと、國々になほ聞けること多かるを、今はふ
 と思ひ出でたる事をいふなり。なほ思ひ出でむまゝに、またも
 いふべし。
 (本居宣長「玉かつま」)

説
 なまさかしき
 今様
 歌の種
 皆世風
 なりもて
 なつて
 轉化

一三 岡部日記

あはれ都にありつるほどは、あからさまながら、年のはに故
 郷に歸りなどしければ、さのみもあらざりしを、今はたやすく
 も歸るまじく思ひなしつれば、千里の道に老いたるたらちね
 を置きまつりて、とみの事ありともいかでか知らむ。知るとも
 いかでかとみにゆきいたらむ。今やいかなる事かあらむ、いか
 なる心にかますらむなど、人やりならぬ胸さわがれつること
 日ごとにありしを、世のさがあはれなるものにて、うつたへ
 に忘るとはあらねども、友がきもいで來て、高きいやしきゆき
 かひしけるに、二つなき心のまぎれやすく、過しぬ。此の秋は
 いざなふ人さへあれば、いでや母をもをがみ、つま子はらから
 にも逢はばやとて、後の七月八日つとめて立ちいづ。此のあら

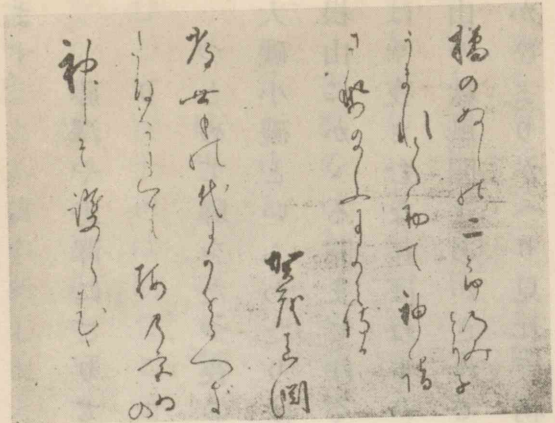
後の七月 陰曆にて
 閏七月の稱。

ましいふころ、人々別をしむとて、からやまとの歌、一百ばかりもあらむかし。そはことものにしるしつ。友がきのなごりなきにしもあらねど、ちぎりおく日數いくばくならねば、先すゝまゝ、心にはいたしともおもほえず。品川の驛^{つぎ}わたりは、海の面ゆほびかなり。夜の雨晴れて、白雲おほく海の空にかゝれるは、伊豆のみ崎と安房の大山となり。此の處は袖の浦とぞいふなど、あを田かく奴のみだりにいふはをかしきものから、いづくにまれときあらひぎぬ著む日までは、その名のゆかしきや。あきかぜいとゞしく身にしむに、

旅人は衣手さむししばしなほこゝろして吹け浦の秋風

關吹きこゆるなどよみけむ思ひいでらる。富士の山はひつじさるの空に見ゆ。これぞおのがながむる方なるに、故郷人は

こなたをこそと思ふも、こたびはうれし。をちつとし東に來にけるほどに、



賀茂眞淵筆蹟

東路^{アヅマミチ}にありと聞きつる
ふじのねを夕日の空に
かへりみるかな
とながめて、かぎりなく遠くも
來にけりとわびつるにはかは
れり。
程ヶ谷の宿すぐるほど、空く
もりみ晴れみたゞならねば、雨
づつみするに、しばらくして氣

色やみにけり。藤澤のうまやにやどるらむとて行くに、しなの阪といふ阪をくだれば、田の上、山もとなどに濁りたる水いと

品川 東京市品川区の町。江戸時代には東海道最初の宿驛たりき。
伊豆のみ崎 神奈川縣三浦郡三浦半島をいへるなるべし。
安房の大山 千葉縣安房郡なる鋸山をいへるなるべし。
ときあらひぎぬ「ゆふされば秋風さむし我妹子が解きあらひ衣行きてはや著む」萬葉集

關吹きこゆる「秋風の關吹きこゆるたびごとくに聲うちそふる須磨の浦波」(壬生忠見)
ひつじさる 未申。西南。十二支を方角に配したる稱。

橋のぬしの二郎のみどり子うまれて初て神詣させ玉ふによみ侍る 賀茂眞淵 常世もの代にかをるべきたねなれば梅の宮の神ぞ護らむ
程ヶ谷 横濱市程ヶ谷區。
藤澤 神奈川縣高座郡の町。
しなの阪 品野阪。程ヶ谷と戸塚との中間にあり。武藏。相模の國境にあたる。

高きは、こゝにしもいたく降り大イタクにけるなりけり。大山は今もふりぬべき雲のふるまひなり。この山ぞあふりの神にておはします。

○藤澤や野澤にござりて水上ウミノのあふりの山に雲かゝるなり

つとめて驛をたつ。夜の雨に道いとあしくて、従者わぶめり。大磯・小磯といふわたりは、よろぎがいそなるべし。夕つけて箱根山にかゝる。關まではくるしとて、畑といふ處にやどる。いとはや夜さむなれば、ねもいらぬに、瀧の音、鹿の聲うちこめたる山の秋風、聞きあかされて立出でぬ。ほのゝと明けゆく山のかひよりかへり見れば、朝霧白くたちわたれるは、海を見むこちす。關こゆるほど、日さしのほりて、湖の面のどかに見わたさる。かなたこなたの山をめぐれる水の面は、三巴ミトといふや似

大山 神奈川縣の中部に聳ゆる山。あふりの神 大山に鎮座する縣社阿夫利神社をいふ。

大磯・小磯 神奈川縣中郡大磯町の海岸。古名をこゆるぎの磯、又よろぎの磯といふ。
畑 神奈川縣足柄下郡湯本町の字。

三巴 支那四川省にある勝地。揚子江

の水廻りて巴の如くなるより、此の名ありといふ。
蠶叢 四川省の勝地。險路を以て聞ゆ。

つらむ。蠶叢に擬したる人はたればかりなるや。その後いくばくの人かのぞみ見けむ。この湖にさせる聞えなきぞあやなき。からうじて三島の驛に至る。ふるき歌にちゝの實の父とつづけしは、木の實にて、この國にありといふ人のありしかば、問ひもとむれど見知れる人もなし。

古郷のはゝその蔭はとひゆけどちゝのみなきぞ悲しかりける

けふは雲まよひて富士も見えず。原の宿わたりより雨ふらむとす。富士川は明日こそわたるべきを、水嵩やまさりなむ。夜をかけてだに蒲原の宿までいかでゆかむとて、夕つかたより立ちまよふ雲のあしとともにいそぎつゝ行くに、空晴れて、おもはざるに月さやかにいでにけり。(賀茂真淵「岡部日記」)

原 靜岡縣駿東郡の町。
蒲原 靜岡縣庵原郡の町。
賀茂真淵 國學者。遠江國の人。始め京都に上り、荷田春滿に従ひ學び、後江戸に下りて田安宗武の國學の師となる。明和六年(一七六八)年歿、年七十三。

一四四季

折ふしの移りかはるこそものごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされ」と、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひとときは心も浮きたつものは春の景色にこそあめれ鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣ねの草萌出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう／＼けしきだつほどこそあれ、折しも風雨うち續きて、心あわたしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古のことも立ちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに茂りゆくほどこそ、世

春はまふ花のいろはさくばかり
物のおはれは秋こそまふかり

花橘は「さつきまつ花橘の香をかげは昔の人の袖の香ぞする」古今集

灌佛の頃 四月八日 佛生會

のあはれも、人の戀しさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、菖蒲葺く頃、

早苗とる頃、水雞の叩くなど、心

細からぬかは。六月の頃あやし

き家に夕顔の白く見えて、蚊遣

火ふすぶるもあはれなり。六月

祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけ

れ。やう／＼夜寒になるほど、雁

鳴きて来る頃、萩の下葉色づく

ほど、わさ田刈りほすなど、取集

めたる事は秋のみぞ多かる。ま

た野分の朝こそをかしけれ。いひつゞくれれば、みな源氏物語、枕



祓

月

六

祭の頃 賀茂神社の祭。四月中の酉の日を以て行はる。

六月祓 夏祓・名越祓ともいふ。六月晦日に行はるゝ祭事。

源氏物語 五十四帖 紫式部の著。枕草子 清少納言の著。異本多くして卷數一定せず。

草子などにことふりにたれど、同じことまた今更にいはいはじと

にもあらず、おぼしき事いはぬは腹ふく

る、業なれば筆にまかせつゝあぢきな

きすさびにて、搔いやり棄つべきものな

れば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ秋にはをさゝ

劣るまじけれ、汀の草に紅葉の散りと

まりて、霜いと白う置ける朝遣水より煙

の立つこそをかしけれ、年の暮れはてて、

人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれ

なる。すさまじきものにして、見る人もな

き月の、寒けく澄める二十日餘りの空こ

そ心細きものなれ。御佛名荷前の使立つなどぞ、あはれにやむ



追 離 式

ごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて、催し行はるゝ
さまぞいみじきや。追離より四方拜につゞくこそおもしろけ
れ。

つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるま
で人の門たゝきはしりありきて、何事にかあらむ、ことごとくし
くのゝしりて、足を空にまどふが、曉方より流石に音なくなり
ぬるこそ、年のなごりも心細けれ。亡き人の來る夜とて、魂祭る
わざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほすること
にありしこそあはれなりしか。

かくて明けゆく空の景色、昨日に變りたりとは見えねど、引
きかへ珍らしき心地ぞする。大路の様、松立て渡して花やかに
嬉しげなるこそ、またあはれなれ。
(吉田兼好「徒然草」)

御佛名 十二月十九日より三日間空

に行はるゝ佛事。六根の罪を消滅させるためなり。荷前の使 毎年諸國より奉る眞穀の荷一の初穂を諸陵に獻ず。その使を荷前の使といふ。十二月中の吉日を選びて遣はさる。

吉田兼好 姓は卜部氏。洛北吉田に居りしを以て吉田と稱す。後剃髮して俗名をそのまゝ法名とす。正平五(二〇一〇)年歿、年六十九。

一五 高瀬舟

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ



呼出されて、そこで暇乞をする。森とを許された。それから罪人は高瀬舟に乘せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送する

のは、京都町奉行の配下にある同心で、此の同心は、罪人の親類の中で主立つた一人を、大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた。黙許であつた。當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したもの

と認められた人ではあるが、決して盗をするために、人を殺し、火を放つたといふやうな、獐惡な人物が多數を占めてゐたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、所謂心得違のため、想はぬ科を犯した人であつた。

さういふ罪人を乗せて、入相の鐘の鳴る頃に漕出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つゝ、東へ走つて、賀茂川を横ぎつて下るのであつた。此の舟の中で、罪人と其の親類の者とは、夜どほし身の上を語り合ふ。いつもいつも悔んでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚、眷族の悲惨な境遇を細かに知ることが出来た。所詮町奉行の白洲で表向の口供を聴いたり、役所の机の上で口書を読んだりする役人の、夢にも窺ふことの出来ぬ境遇である。

高瀬川 京都市二條通にて賀茂川を分水したる流にて、伏見に至りて宇治川に合す。慶長年中角倉了以の開鑿にかゝる。

京都町奉行 江戸幕府の職制の一。老中の支配に屬し、京都に駐在して、市中一般の政務を行ひ、畿内其他八個國の租税の件、裁判に關する件、社寺に關する件を管理せしもの。定員二名。與力二十

騎、同心五十名、各これに屬す。

同心を勤める人にも、いろ／＼の性質があるから、此の時ただうるさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみ／＼と人の哀を身に引受けて、役柄ゆゑ氣色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつては、非常に悲惨な境遇に陥つた罪人と其の親類とを特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになる。其の同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間て不快な職務として嫌はれてゐた。

いつの頃であつたか、多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつただらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類のない珍らしい罪人が高瀬舟に乗せられた。

それは名を喜助といつて、三十歳ばかりになる住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、舟にも唯一人で乗つた。

護送を命ぜられて、一緒に舟に乗込んだ同心羽田庄兵衛は、唯喜助が弟殺しの罪人だといふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、此の瘦肉の色の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、温順を装つて權勢に媚びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乗つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の舉動に細

白河樂翁 松平定信。
その老中たりしは
天明七(二四四七)
年より、寛政五(二
四五三)年に亘る。
知恩院 京都市東山
區にある淨土宗の

寺。

かい注意をしてゐた。

其の日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪郭をかすませ、やう／＼近寄つて来る夏の温かさが、兩岸の土からも、川床の上からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、たゞ舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである。

夜舟で寝ることは、罪人でも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで黙つてゐる。その額は晴やかで、目には微かな輝きがある。

庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さずにゐる。そして不思議だ、不思議だと心の内で繰返してゐ

下京 今京都市下京区。

る。それは、喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しさうで、若し役人に對する氣兼ねがなかつたなら、口笛を吹き始めるとか、鼻唄を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衛は心の内に思つた。これまで此の高瀬舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。併し乗せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それに此の男はどうしたのだらう。遊山船にでも乗つたやうな顔をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其の弟が悪奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。此の色の蒼い瘦男が、其の人の情といふものが全く缺けてゐるほどの、世にも稀な悪人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐる

のではあるまいか。いや、それにしては何一つ辻褁ツヅムの合はぬ言語や舉動がない。此の男はどうしたのだらう。庄兵衛がためには、喜助の態度が考へれば考へるほど分らなくなるのである。

暫くして、庄兵衛は怵コラへ切れなくなつて呼掛けた。

「喜助、お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」といつてあたりを見廻した喜助は、何事をお役人に見咎とがめられたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して、庄兵衛の氣色を窺つた。

庄兵衛は、自分が突然問を發した動機を明して、役目を離れた應對を求め、いひわけをしなくてはならぬやうに感じた。そこで、かういつた。

「いや、別にわけがあつて聽いたのではない。實はな、己は先刻

からお前の島へ往く心持が聽いて見たかつたのだ。己はこれまで此の舟で大勢の人を島へ送つた。それは随分いろ／＼な身の上の人だつたが、どれも／＼島へ往くのを悲しがつて、見送に來て一緒に舟に乗る親類のものと、夜どほし泣くに極つてゐた。それに、お前の様子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだい。」

喜助はにつこり笑つた。

「御深切に仰しやつて下さつて、有り難うございます。なるほど島へ往くといふことは、外の人には悲しいことでございます。せう。其の心持はわたくしにも思ひ遣つて見ることが出来ません。しかしそれは世で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、其の結構な土地で、これまでわたくしのいたして參つたやうな苦しみは、どこへ參つて

もなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしつらい處でも、鬼の栖む處ではございませぬ。わたくしはこれまで、どこいつて自分のゐて好い處といふものがございませぬ。今度お上で島にゐると仰しやつて下さいます。そのゐろと仰しやる處に落著いてゐることが出来ますのが、先づ何よりも有り難い事でございます。それにわたくしは、こんなにかよわい體ではございませぬ。ついで病氣をいたしたことはございませぬから、島へ往つてから、どんなつらい仕事をしたつて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それから、今度島へお遣り下さるに付きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをここに持つてをります。鳥目の大袋の入り口へ、さきほどお遣り下さるやうな、さかういひかけて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けら

鳥目 錢の異稱。

れるものには、鳥目二百文を遣はすといふのは、當時の掟であつた。

「喜助は語を繼いだ。お恥づかしい事を申し上げなくてはなりません。わたくしは今日まで二百文といふおあしを、かうして懐に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きました。それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ手に渡さなくてはなりません。それと現金で物が買つて食べられる時は、わたくしの工面のよい時で、大抵は借りたものを返して、又跡を借りたのでございませぬ。それがお牢にはひつてからは、仕事をせずには食へさせず、戴きます。わたくしはそればかりでも、お上に對して濟まない事をいたしてゐるやう

でなりませぬ。それにお牢を出る時に、此の二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此の二百文はわたくしが使はずに持つてゐることが出来ませぬ。おあしを自分の物にして持つてゐるといふことは、わたくしに取つては、これが始でございます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出来るか分りませんが、わたくしは此の二百文を、島でする仕事の元手にしようと思つてをります。

かういつて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衛は「うん、さうかい。」とはいつたが、聴く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何もいふことが出来ずに考へ込んで黙つてゐた。

庄兵衛はかれこれ初老アキに手のとゞく年になつてゐて、もう

子供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇シソウといはれるほどの儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために著るものの外、寝巻しか拵へぬくらゐにしてゐる。しかし不幸なことには、妻を好い身代の商人の家から迎へたそこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕な家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が満足するほど手元を引締めて暮して行くことが出来ない。動もすれば、月末になつて勘定が足りなくなる。すると、女房が内證で里から金を持つて來て、帳尻を合はせる。それは夫が借財といふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さういふことは、所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衛は五節句だといつては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だといつては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思

つてゐるのだから、暮しの穴を填めて貰つたのに氣が附いては、好い顔はしない。格別平和を破るやうなことはない。羽田の家に、折々波風の起るのはこれが原因である。

庄兵衛は今喜助の話を聽いて、喜助の身の上をわが身の上へ引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡してなくしてしまふといつた。いかにも哀な、氣の毒な境界である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれほどの差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば算盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有り難がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそ

れを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其の心持は、こつちから察して遣ることが出来る。併し、いかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見附けるのに苦しんだ。それを見附けさへすれば、骨を惜しまずに働いて、やう／＼口を糊することの出来るだけで満足した。そこで、牢にはひつてからは、今まで得がたかつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ満足を覺えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が

合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るに、そこに満足を感じたことは殆どない。常は幸ひとも不幸とも感ぜずに過してゐる。併し心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようといふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取出して来て穴填めをしたことなどが分ると、此の疑懼が意識の闕の上に頭を擡げて來るのである。

一體此の懸隔はどうして生じて來るだらう。唯うはべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだといつてしまへばそれまでである。併しそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない。この根柢はもつと深いところにあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛は唯漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此の病がなかつたらと思ふ。其の日其の日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄へがないと、少しでも蓄へがあつたらと思ふ。蓄へがあつても、又其の蓄へがもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏止ることが出来るものやら分らない。それを今日の前で踏止つて見せてくれるのが此の喜助だと、庄兵衛は氣が附いた。

庄兵衛は今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此の時庄兵衛は、空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。(森鷗外「鷗外全集」)

森鷗外 名は林太郎。醫學博士・文學博士。陸軍軍醫總監。陸軍省醫務局長。帝國美術院長。東京帝室博物館長等に歴任。大正十一年歿、年六十一。

一六 金華山

八月三十一日 やつこのこと船が漕ぎだされた。三人が
 櫓を押して、舳の一人が櫂を取る。巉巖に添うて船が進む。鹿渡
 しの岬に近づくと、波は澎湃として、船が思ひ切つて揺れる。岬
 に打ちつける波は花崗石の如き白い柱を立てる。北方に開け
 た海上には、江の島列島が大小相竝んで、狭い瀬戸の間から見
 える。列島は波の穂に隠れてはまた現れる。桐油を頭からかぶ
 つて、余と向合ひになつてゐた男は、目がどろつとして、さつき
 から下脣が垂れたまゝであつたが、遂に桐油でぐるつと顔を
 くるんで轉がつてしまつた。他の道者も顔が眞蒼になつて、小
 縁へしがみついたまゝ、反吐をついてゐる。老人の押してゐた
 櫓は櫓べそが外れた。老人は狼狽して嵌めようとしたが、船の

金華山 宮城縣牡鹿
 郡の東端に近き島。

八月三十一日 明治
 三十九年。

鹿渡しの岬 牡鹿郡
 鮎川村の東北端。
 金華山に最も近き
 陸地。

江の島列島 金華山
 の北方約十軒に横
 たはる列島。

動搖が激しいので、幾らあせつても嵌らぬ。止めろ、止めろ。いゝ
 や、と、兩肩からうんと力を入れた若い男が、聲にも力が籠
 つて、叱りつけるやうにいつた。老人は極りわるげに船の底に
 蹲つた。雲が一方から段々にはげると、三角に握つた握飯のや
 うな金華山が、頭から押へつけるやうに聳えてゐる。中腹の神
 社から下には、缺て梢を刈込んだやうな木立が青い芝の間に
 鹽梅されて、庭園の如く見える。常磐木の繁茂した山上には、綿
 打弓から飛ぶ綿のやうな雲がちぎれてゐる。

神社 縣社黄金神社。

船が岸へ著くと、道者は一同に漸く生返つたといふ鹽梅で、
 「船ぢや弱つたなあ」といひながら、ばらばらと勢よく駈上がつ
 た。青い芝は地にひつついたやうになつてゐて、絲薄の叢が連
 なつてゐる。道者が口々に「鹿、鹿」と呼んだら、思はぬ絲薄の中か
 ら大きな角が動いて、鹿が五六匹現れた。土産を出して見せる

と、五六尺の近くまで寄る。こちらから更に近づくと、ついと逃げる。投げてやればたべる。一行の旅装が黄色な桐油を掛けたり、笠をかぶつたりしてゐるので、氣味が悪いのであらう。鹿が煎餅をたべるところを、道者が三四人で手と手をつないで、鹿を阪の下へ追ひつめようとしたが、鹿は軽く跳び退いて、けろつとして立つてゐる。道者はこんなことをしては騒いで、船の中にゐた時とは別人のやうである。よく見ると、鹿は絲薄の中に、そこにもこゝにもけろつとして立つてゐる。其の斑紋の美しいことは、奈良の鹿などの到底及ばぬところである。顧みれば、一行の乗つて來た船は追手に帆を揚げて、雨の中に遙かに隔つてゐる。木立にはひると、庭木のやうに見えたのは、皆二抱へ三抱への樹ばかりであつた。

雨はしとくとして深更まで止まぬ。厠へ立つたら目の前

をひらりと跳ぶものがあつた。驚いて見ると鹿である。手を出したら、鹿は指のさきへ鼻づらをこすりつけた。

九月一日 社務所から出た一行十人ばかり、白衣の先達に案内されて金華山を登る。阪が極めて峻しい。曉の霧がひやひやと梢を渡つて、雫がはらくとかゝる。老樹の鬱然として濕つばい間を行くので、深山のやうな寂しい心持がする。忽ち後ろの方で「猿、猿」となる者があつたので、振りかへると、一行のうち三四人が立止つて、梢を仰いでゐる。余も急いでおりて行つて見ると、五六匹の猿が樅の喬木に枝移りをしてゐるところであつた。猿はゆさ／＼と枝を揺がしながら四足を立てて、こちらを見おろしてゐる。赤い顔が仄かに見える。余は猿の樹にゐるのを見たのは、これがはじめてである。からかつても見たいやうな氣がした。一行の者は皆樹の下へ集つて、手を叩

いたり樹を揺ぶる眞似をしたりして騒いだけれど、彼等は一
向平氣で、枝をゆさゆと揺がしてゐる。猿といふものは何處
で見ても剽輕ヒヤクなものである。

道者の一行が騒いでゐるうちに、先達は一人で行つてしま
つたかして、後姿が見えなくなつた。ばらばらと先達の後ろを
追掛けながら、道者の一人がいふのを聞くと、この前に來た時
は猿が丁度栗を揺落したところへ通りかゝつたので、みんな
拾つてしまつたら、枝から糞をかけられた。といふのであつた。

山巔の小さな社の縁へ腰をかけて、一行のものは社務所で
くれた紙包の握飯を開いた。縁先には僅に二坪ばかりの芝生
がある。何處から來たか鳥が二羽來て、一羽は芝生のめぐりに
立つた樹木の、とある枯枝へ止つて、一羽は足もとへおりた。お
りた鳥は嘴をあげたり首を曲げたりして、握飯が欲しさうに

見てゐる。余は鹿の土産がまだあつたので、投げてやつたら、ひ
よいと一跳ね跳ねて、それを啗へて元の處へ戻つて、足で抑へ
て食ふのである。さうしてまた嘴をあげたり首を曲げたりし
て見てゐる。握飯を包んだ紙を投げてやつたら、嘴で引返し引
返しして、その紙の中の飯粒を食ふのである。幾百千の參詣者
が繰返し繰返し登山するので、鳥までがこんなに馴れてしま
つたものであらうが、深い木立の間を雲霧に濡れて漸く山巔
について、何となし人寰ヒトノを離れた感じであるところへ、こんな
鳥が飛んで來たのは、更に別天地のやうに思はれた。一人が握
飯の食残しをくれたら、何と思つたか、それを啗へたまゝ、霧深
い谷をさして飛んでしまつた。飛ぶ時に、啗へた握飯がぼろり
と缺けて芝の上へ落ちた。枯枝に止つてゐた一羽はこちらを
見おろしてゐたが、遂におりては來なかつた。さうしてこれも

大きな聲で鳴いたと思つたら、ついと芝の上の飯をさらつて飛んで行つた。外洋の霧は山陰の梢を吹きあげて、蓬々として更に吹きおろす。木の葉が交つて飛散る。

霧の吹きつけるなかに山陰へおりる。やつぱり樹木が深くて阪が急である。段々おりて行くうちに霧が薄らいで、枯れた梢の間から空が朗かに見え出した。また誰か後ろの方で「鹿、鹿」とどなつた。あれ、あれ」と一人が指してゐる方を見たら、その時はピオウと鳴いた聲ばかりで、鹿は見えなかつた。ピオウとまた鳴いた時は、聲が遙かに遠くなつて、三聲鳴いた時は、やつと聞取れるほどであつた。

深い木立を出ると、疎らな赤松が見え出して、窪んだ草原のやうな處になつた。先達は、皆さん、此處は不淨場であります」といつて、自分が先に小用をした。一行の者も皆これに眞似た。草

の中には羊齒の葉が秀でて、既に枯れた自然生の芍薬も交つてゐる。此處からすぐに海へ出る。岸は皆削り立つた大きな巖である。断面には縦横に切目があつて、恰も十文字に繩を掛けた大荷物が問屋の庭に積みあげられたやうな形である。小徑は此の斷崖の上をめぐりめぐつて北へ走る。一行はばらばらになつて先達に跟いて行く。左を仰いで見ると、鬱蒼たる山の巔は頭に掩ひかぶさつたやうで、その急峻な山の脚は、恰も物陰から大手を開いて現れた人が奔馬をばつたり食止めたやうに、この小徑で切斷されてゐる。小徑に沿うて到る處青芝と絲薄が茂つてゐる。さうして絲薄の中には疎らに赤松が聳えてゐる。時々鹿に逢ふことがある。山陰にゐる鹿はよく馴れてはをらぬと見えて、屹度逃げて行く。一つか二つか離れてゐるのがひよつこり人を見ると、非常に狼狽して叢を跳ねて逃げ

て行く。絲のやうな脚で跳ねるのが、ふわ／＼とした綿の上でも跳ねるかと思ふやうに見えて、如何にも輕げである。驚いて逃げる時にピオウと細い聲で鳴き捨てるのである。五六匹も揃つてゐると、體と體と押し合ふやうにして、或距離の處まで行つてしまふと、けろつとして何時までもこちらを見送つてゐる。無邪氣なものである。鹿の尻はもつこ禪をはめたやうだなあ。といふ聲が、又後ろの方から聞えた。

大箱の岬といふ札の立つた處へ出た。急な山の脚が海へ踏込む前に、青芝の小山を拵へて、其の小山の頂近くから截斷して海へ捨ててしまつた時に恐ろしい懸崖が出来た。これが大箱の岬である。四つに這うて覗いて見ると、さら／＼と僅に碎ける白波が遙かの下である。其の遙かな下の方に小さなものが動くやうに見える。それがだん／＼昇つて、近づくところを

大箱の岬 金華山の最東端。

見ると、一匹の小さな蝶であつた。暫く見てゐたら心持が悪いやうになつた。青芝は地にひつついたやうで綺麗である。鹿が此の芝を喰ひに来ることがあると見えて、豆粒のやうな鹿の糞がころ／＼と轉がつてゐる。青芝の上に休んでゐると、何時の間にか蝶は懸崖の面を舞ひあがつたものと見えて、小さな黄色い羽をひら／＼と動かしながら、めぐりめぐつて鹿の糞へ止つた。際涯もない外洋を望むと、今日ばかりは波がないのかと思ふほど平靜である。

余は一朝暴風が此の平靜な海を吹亂して、雲と相接してゐる水平線の先の先から煽り立てて来る激浪が、此の大箱の懸崖の下に吼えたけびて、しぶきのとばしりが此の青芝へ氷雨の如く打ちかゝる時に、牡鹿が角を振立てて此の岬に突立つところを想像して見た。(長塚節「長塚節全集」)

長塚節 歌人。文學者。茨城縣の人。大正四年歿、年三十七。

一七時 雨

十一日の朝も時雨が通った。

「此方でござりまする。」と仁左衛門の聲、つゞいて飛石を踏む雪駄の音。

「や、どうも御手数をかけました。」といふ思もかけない其角の聲に、惟然支考、丈草去來等争つて縁に出て、「これはどうして。」と異口同音に尋ねた。丈短な淺黄の羽織に子持縞の重ね著、肥つて活々とした其角の姿は、滅入り切つた連衆の心をそゞろに引立たせた。

其角は、「御免下され。」と、皆に挨拶もそこ〜に、直ぐに病床に通つた。そして芭蕉を一目見るなり、ぎよつとして一言も口が利けなかつた。彼は今年の五月八日に品川まで見送つた一人



(筆浦九田野) 蕉 芭

十一日 元禄七(二

三五四)年十月。

芭蕉病歿の前日。

仁左衛門 大阪御堂

前南久太郎町なる

花屋仁左衛門。芭

蕉はその裏座敷に

病臥せるなり。

其角 名は榎本源助。

江戸の人。芭蕉の

門人。寶永四(二

三六七)年歿、年

四十七。

惟然 名は廣瀬素牛。

美濃國の人。芭蕉

の門人。正徳五(二

三七五)年歿。

支考 名は各務見龍。

美濃の人。芭蕉の

門人。享保十六(二

三九二)年歿、年

六十八。

丈草 名は内藤林右

衛門。尾張國の人。

であつた。其の時の芭蕉はえらい元氣であつたのに、皮骨連立したこの姿は、——彼は二目と見得ず、俯向いて坐つてゐた。芭蕉も一言もいひ得なかつた。凹んだ眼からは只涙が流れた。

丈草が見かねて、其角の袖を引いて次の間へ呼んだ。其角は改めて一同に挨拶をした。五人連で伊勢參宮をして、それから和州・紀州・泉州と遊び歩いて、昨夜難波に著くと老師重病との噂、それから直ぐに方々問合はせた末、やつと今朝になつて御堂前と知れて、連に別れ、駕籠を飛ばして來たのだと物語つた。皆が交るゝ、今までの經過を話した。それでは到底助る見込はない。老師はこゝで終焉であらう。然し風流の一生を完成して、徳化は洽く、かく多數の門弟に圍繞されて果てられる、まことに有り難い、尊い事だと、其角は師のために大きな満足を感じた。この満足な感じは、不知不識の間に皆も持つやうにな

芭蕉の門人。寶永元(二二六四)年歿、年四十二。
去來 名は向井兼時。京都の人。芭蕉の門人。寶永元(二二六四)年歿、年六十二。
芭蕉 名は松尾忠左衛門。俳人。伊賀國の人。元祿七年歿、年五十一。

つてゐた。突詰め差迫つた後に、今は安靜な氣が、この花屋の裏座敷に満ちわたるやうにさへ覺えた。
 「大變御機嫌が宜しうなりました。皆様にこちらへおいでになるやうに。」と吞舟がいつて來た。其角が先に立つて、皆々病室に入つた。其角は改めて師にこゝへ來たまでの旅行の話などした。

吞舟 近江國の人。
 芭蕉の門人。

芭蕉は珍らしく起きてみるといつて、背後から次郎兵衛に支へられ、前の脇息を力に坐つて、さも嬉しさうに弟子達の話に耳を傾けた。然し直ぐに疲れて又横になつた。芭蕉の心には、もう煩悶も何もなかつた。妄執だとか、妄執でないとか、そんなことを忘れて、心は春のやうに風ぎわたつた。只静かな落著いた日であつた。芭蕉はよくすやくと寐た。
 「粥が食ひたうなつた。」

次郎兵衛 伊賀國の人。
 芭蕉の門人。

夜に入つてから、突然芭蕉がかういつた時、一同の喜は飛立つばかりであつた。次郎兵衛は早速勝手へ行つて、いそぐと粥を作つて進めた。さも旨さうに中嵩椀で食べた。朔日以来の食事であつた。土鍋の中に残つたのを、去來は椀に移して、押しいたゞいて食べた。そして、ふと、

朔日 十月朔日。九月二十九日發病。

病中のあまりすゝりて冬ごもりといふ句が出來た。それから去來が、一つ師を慰め申すために、深く案じ入らずとも、頓に句を作らうではないかと發議した。「すでに出來合ひがあります。」
 惟然がかういつて、丈草と二人笑ひ合ひながら書きつけたのを見ると、

ひつ張りて蒲團に寒き笑かな
 思ひよる夜伽もしたし冬籠り

惟 然
 正 秀

正秀 名は水田利右衛門。近江國の人。
 芭蕉の門人。享保八(一三三三)年歿。

といふのであつた。

「昨夜は正秀と二人で寝たところが、寒かつたものだから、一枚の蒲團を互にあつちへ引張り、こつちへ引張つて、とう／＼夜明まで落著いて寐られなかつた。」と惟然が大きな聲で説明をした。皆どつと笑つた。芭蕉も笑つた。人々はそれを見て限なく嬉しく思つた。

くじ取りて茶飯たゝかす夜伽かな 木節

皆子なり蓑蟲寒くなき盡くす 乙州

うづくまる薬のものと寒さ哉 丈草

吹井より鶴を招かん初時雨 其角

こんな句が集つた。それを一々惟然が師の側へ行つて吟聲した。丈草の句をもう一度と芭蕉が望んだ。

うづくまる薬のものと寒さ哉

と又惟然が吟じた。

「丈草でかされた。いつ聞いても寂楽が調うてゐる。面白い、面白い。」と、噓れた聲で芭蕉は譽めた。

いつに無く上機嫌な師の様子に、皆の心には本復されるかも知れぬといふ望が光つた。其角は木節の様子を見た。木節は獨り愁然としてゐた。それとなく其角は木節を一問へ呼んで、どうであらうと訊いた。

「いけません、とてもいけません。あの大病で、絶食の後、俄に食が進んだり、氣分が宜うなることのあるのは、もう先のない兆で御座ります。」と木節は答へた。成程と其角も思つた。

病室では笑まじりに賑やかな聲が聞えてゐた。

(沼波瓊音「芭蕉の臨終」)

木節 近江國の人。
芭蕉の門人。醫を業とす。
乙州 近江國の人。
芭蕉の門人。

沼波瓊音 名は武夫。
國文學者。愛知縣の人。東京帝國大學卒業。第一高等學校教授。昭和二年歿。年五十一。

一八 花の雲

花の雲鐘は上野か浅草か 芭蕉

雲雀より上に休らふ峠かな

蛸壺やはかなき夢を夏の月

名月や池をめぐりてよもすがら

三井寺の門たゝかばや今日の月

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

目には青葉山郭公初鯉 素堂

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春 其角

聲かれて猿の齒白し峰の月

黄菊白菊その外の名はなくもがな 嵐雪

梅一輪一輪ほどのあたゝかさ

元日や家にゆづりの太刀佩かん 去來

秋風やしら木の弓に弦はらん

大原や蝶の出て舞ふ朧月 丈草

時鳥鳴くや湖水のさゝにごり

長々と川一筋や雪の原 凡兆

素堂 名は山口信章。俳人。甲斐國の人。享保元(二二七六)年歿、年七十五。

嵐雪 名は那部彦兵衛。俳人。淡路國の人。寶永四年歿、年五十四。

凡兆 姓は野澤。俳人。加賀國の人。

振りあぐる歎の光や春の野良 杉風

破鐘のひびきも暑し夏の月 北枝

叱られて次の間に立つ寒さかな 支考

牛叱るこゑに鶴立つゆふべかな

欄干にのぼるや菊の影ぼふし 許六

涼風や青田の上の雲の影

更けゆくや水田の上の天の川 惟然

長松が親の名で来る御慶かな 野坡

杉風 名は杉山一元。

俳人。江戸の人。享保十七(二三九二)年歿、年八十六。

北枝 名は立花三郎右衛門。俳人。加賀國の人。享保三(二三七八)年歿。

許六 名は森川百仲。

俳人。近江國の人。正徳五(二三七五)年歿、年六十。

野坡 名は志田彌助。

俳人。越後國の人。元文五(二四〇〇)年歿、年七十八。

一九百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限なるべし。それも啼く音を愛づるものならねば、籠に苦しむ身ならぬこそ猶めてたけれ。さてこそ莊周が夢もこの物には託しけめ。

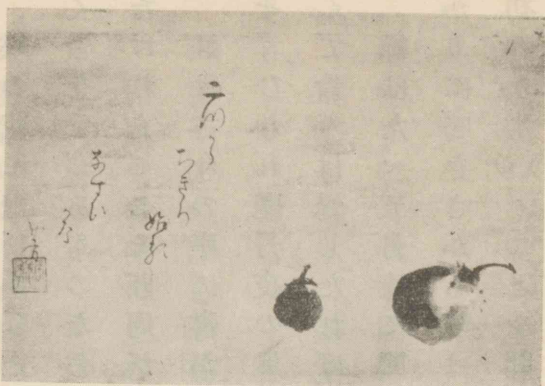
蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸ひなれ。隴月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものこと更にも謗りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。や、日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、この者ばかり初蟬といはるゝこそ大いなる手柄なれ。やがて死ぬけしきは見えず。と、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

もしなれば
かみかみの
苦やうけん
やをうけん
歌申し
とある
蛙かた

莊周が夢も云々「昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也。自喻適志與、不知周也。俄然覺、則蘧々然周也。不知周之夢爲胡蝶、與、胡蝶之夢爲周與。」(莊子齊物篇)
古今の序「花に啼く鶯、水に棲む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるものいづれか歌を詠まざりける。」(古今集假名序)
古池に「古池や蛙と

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇は只このもののためやとまでぞ覺



横井也 有筆 蹟

ゆる。しかるに貧の學者にとられ、て、油火の代にせられたるは、このもの本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはこの眞似すべからず。

茅蝸ひびは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならむ、つくづく、ぼふ

しといふ蟬は、つくし戀ひしともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀

魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛は巧に網を結んで、潜まつて物を害せむとす。退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代、朝敵の初として、頼光をさへおびやかしたる、いと恐ろし。さはいへ廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、聊かあはれ添ふ折もあらむか。彼はかひなく、しく巢作りてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらむ。蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。蜉蝣ははかなきためしに引かれ、蓼くふ蟲は不物ずきの謗となれり。さは俳諧するものを、俳諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。

同じ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、黄金蟲はいやし。蟻は明暮に忙はしく、世のいとなみに隙なき人には似たり。

びこむ水の音芭蕉やがて死ぬ「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」芭蕉の貧の學者云々。晉の車胤の故事。胤字武子、幼恭勤博覽。貧、不常待油。夏月以練囊盛數十螢火、照書讀之。晉書車胤傳

二つからちぎり始るなすびかな也 有

退隱の媒「楚國饑舍初隨楚王朝宿未央宮見蜘蛛大如栗四面築羅網有蟲觸之而死舍乃歎曰吾生亦如此耳仕宦者人之羅網也豈可淹歳於是挂冠而退時人謂之爲蜘蛛之隱金樓子

東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたより悪しきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。

狗の齒に噛まるゝ蚤はたまゝにして、猿の手にさぐらるる虱は逃るゝこと難かるべし。虱は千手観音と呼ぶに、蚰蜒は梶原といへり。さるは梶原が異名なりや、蚰蜒が異名なりや。先後今は知りがたし。

蝸牛はたゞ水にあるべきもの、いかで草葉に遊ぶらむ。家は持ちたれども、行く先々を負ひ歩くは雲水の安きにも似ず。蛇、蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。蟪蛄の瘦せたるも、斧を持ちたる誇よりその心いかつなり。

人の上にもこの類ひはあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなければ、たゞ原吉原を駕籠に乗りて富士を眺めゆく人には似たり。

促織、鈴蟲、轡蟲はその音の似たるを以て名によばる。松蟲はその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一つ在處に二人の八兵衛ありて、一人は後生をねがひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類ひなるべし。

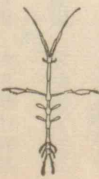
きり／＼すのつゞり刺せとは、人のために夜寒を教へ、藻に棲む蟲は、われからとたゞ身の上をなげくらむを、蓑蟲のちよよと呼ぶは、守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみ戀ひて、などかは母を慕はざるらむ。母をば慕はて、など父をのみ戀ふらむとあやし。

槐安の都「異聞集」曰、淳于芬醉夢人、大槐安國、見王。王曰、南柯郡、屬、卿爲守。居凡二十載。使者送出、穴遂寤。尋、古槐下、蟻穴、洞然、明朝、乃槐安國。又一穴、直上、南枝、卽南柯郡也。書言故事。
歐陽氏、名は修。支那の宋代の文人。(西紀一〇〇七—一〇七二年)「憎」蒼蠅、賦あり。
長嘯子、木下勝俊。若狭小濱の城主。後封を失ひ、隱棲して和歌をよくす。
慶安三(二二二一〇)年歿す。年八十一。
「蟪蛄」紙魚、詞あり。
梶原、名は景時。源頼朝の寵臣。義經を護してこれを陥れたり。正治二(一一二一)

八六〇)年歿す。

吉原、静岡縣富士郡の町。

つゞり刺せ「秋風に、綻びぬらし、藤袴の、づりさせて、ふきり、ぎりすなく」(在原棟梁)
われから「あまの刈る藻にすむ蟲の、われからと音をこそな、かめ世をば、怨みじ」(藤原直子)



蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕べ、始めてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく残りたるは、寂しきかたもあり。蚊蠅つりたる家のさま、蚊やり焚く里のけぶりなど、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。

(横井也有「鶴衣」)

大臣と稱すれども、隨身舎人もしたるがへず。降魔の靈劍ありながら、鎮座せる社も見えず。顔に、手足に、朱をそゞぎて、拔身を執つて振りまはす。もしなま酔かと思てあれば、柏餅を引窓からのぞく。下戸か上戸かわくべからぬ。文武兼備の進士の垂迹、げにちはやふるかみ幟、あふげはいよく、軒にたかし。鬼すまぬわがおほ君の國なれば、鍾馗の劍のぬきがひもなし。(六樹園飯盛)

二〇 白峯の陵

逢阪の關守に許されてより、秋來し山の黄葉見すごし難く、濱千鳥のあと踏みつくる鳴海潟、富士の高根の煙、浮島が原、清見が關、大磯、小磯の浦々、むらさき匂ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蟹が苦屋、佐野の舟梁、木曾のかけ橋、心のとまらぬ方ぞなきに、なほ西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、蘆がちる難波を経て、須磨、明石の浦吹く風を身にしめつも、行くく、讚岐の眞尾阪の林といふに、しばらく筈をとむ。草枕遙けき旅路のいたはりにもあらで、観念修行の便りとせし庵なりけり。

この里近き白峯といふ處にこそ、新院の陵ありと聞きて、拜み奉らばやと、十月はじめつ方、かの山に登る。松柏は奥深く茂

七賢 晉の嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎等は竹林の遊をなせり。
横井也有 俳人。名は時般。尾張藩の重臣。天明三(一七四三)年歿、年八十二。

六樹園飯盛 國學者。名は石川雅望。江戸の人。國文和歌に通じ、狂文狂歌をよくす。文政十三(一八〇二)年歿、年七十八。

逢阪 大津市の南方京都市との中間にある要路。昔時此の地に關所ありき。
鳴海潟 愛知縣愛知郡の海岸。今は陸地となりて、舊形を存せず。
浮島が原 靜岡縣駿東郡愛鷹山の裾にある原野。
清見が關 靜岡縣庵原郡清見潟の近くにありし關所。
むらさき



鹽竈 宮城縣宮城郡の町。
象潟 秋田縣由利郡の町。昔時松島と

り合ひて、青雲のたなびく日すら小雨そぼ降るが如し。兒が嶽
 といふけはしき嶺後ろに峙ち
 て、千仞の谷底より雲霧おひの
 ぼれば、まのあたりをもおぼつ
 かなき心地せらる。木立わづか
 に透きたる處に、土高く積みた
 るが上に、石を三かさねに疊み
 なしたるが、うばらかづらに埋
 れてうら悲しきを、これなむ陵
 よと思へば、心もかき暗まされ
 て、更に夢現とも分きがたし。
 げにまのあたりに見奉りし
 は、紫宸清涼の御座に朝政きこしめさせ給ふを、百のつかさ人



歌僧圓位 (小早川秋聲筆)

併稱せられたる名
 勝なりしが、後鳥
 海山の噴火により
 て埋没し、今舊態
 を存せず。
 佐野の舟梁 群馬縣
 群馬郡佐野村にあ
 りし舟橋。
 木曾のかけ橋 長野
 縣西筑摩郡駒ヶ根
 村にありし棧道。
 仁安三年 六條天皇
 の御宇。一八二八
 年。
 眞尾阪の林 香川縣
 綾歌郡王越村乃生
 の地か。
 白峯 香川縣綾歌郡
 松山村にあり。
 新院 崇徳上皇。

は、かく賢き君ぞとて、詔かしこみて仕へまつりき。近衛院に讓
 りまして、藐姑射の山の瓊の林にしめさせ給ふを、思ひきや、
 麋鹿のかよふ路のみ見えて、詣てつかふる人もなき深山のお
 どろの下に神がくれ給はむとは、萬乗の君にてわたらせ給ふ
 さへ、宿世の業といふものの、恐ろしくも添ひ奉りて、罪をのが
 れさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき
 出づるが如し。夜もすがら供養し奉らばやと、陵の前の平らな
 る石の上に座を占めて、經文靜かに誦しつゝも、かつ歌詠みて
 奉る。
 松山の浪のけしきはかはらじをかたなく君はなりま
 しにけり
 なほ心怠らず供養す。露いかばかり袂に深かりけむ。日は入
 りしほどに、山深き夜の様常ならで、石の床、木の葉の衾いと寒

藐姑射の山 仙洞御
 所。即ち上皇の御
 所。藐姑射の山は
 仙人の住處といへ
 るより、轉じて仙
 洞御所をもかくい
 ふに至る。

く、神清み、骨冷えて、ものとはなしに凄じき心地せらる。

月は出でしかど、茂樹がもとは影を洩らさねば、あやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに、まさしく「圓位、圓位」と喚ぶ聲す。眼を開きて透かし見れば、その形異なる人の脊高く瘦せ衰へたるが、顔のかたち、著たる衣の色紋も見えて、こなたに向かひて立てるを、西行もとより道心の法師なれば、恐ろしともなく、此處に來るは誰ぞ。」と問ふ。かの人いふ、「前に詠みつる言の葉の返りを聞えむとて見えつるなり。」とて、

松山の浪に流れて來し船のやがてむなしくなりにけるかな

「嬉しくも詣でつるよ。」と聞ゆるに、新院の靈なることを知りて、地にぬかづき涙を流しぬ。（上田秋成「雨月物語」）

圓位 西行のこと。
歌僧。俗名佐藤義清。圓位とも號す。鳥羽上皇に仕へたりしが、出家して山水を友とし、四方に周遊す。建久元（八五〇）年寂、年七十三。

上田秋成 文學者。
通稱を東作といふ。大阪の人。文化七（一四七〇）年歿、年七十八。

二二 個性

個性と云ふことに就いて話して見よう。個性とは各々が持つてゐる特質を云ふのだ。その特質のある幾多の個性を、一つの傳統や、或形式の下に束縛して、その發達を妨げると云ふことはもとより悪いことである。さう云ふ意味で個性の自由を説くのは、正當のこととて、また必要のことであるが、さう云ふ意味を取違へて、何でも個性は自由である、勝手なことをすればよいと云ふ風に考へてゐるものがある。

さう云ふ人たちは、自分の個性に或檢束を加へて行くことが自分の個性の修養であると云ふことを知らないのだ。個性の自由と云ふことの意味を取違へてゐるから、かう云ふ錯誤に陥るのだ。個性が自由であると云ふ意味は、めい／＼の個性

がめい／＼の方向を取り得ることの意味である。一個の個性に就いて云へば、その個性が自分のほひるべき道を選ぶことである。個性の自由と云ふことを漠然と考へると、大變廣々とした勝手氣儘が出来るやうに思へるのであるが、さうではなく、個性は自由であるがゆゑに、従つてめい／＼はめい／＼の道にはひる事を必然的に約束づけられるのだ。さうして此のめい／＼の道は、その性質として、暫くめい／＼に不自由な束縛となつて臨んで來るのだ。かやうに個性の自由と云ふことは、その結果に於て個性の不自由となるものだ。と云ふことを聞いたら、多くの我儘論者は驚くことであらう。

子供が出まかせに詩を作る、また出まかせに繪を描く。さう云ふものの中に、斷片的に、また時には一個の作物としてよいところのあるのも事實だらう。しかしそれは、まだ面白いとか、變つてゐるとか云ふくらゐのもので、それに價値があるやうに思ふのは間違つてゐる。價値と云ふのは、目が明いてゐてした仕事でなければならぬ。實は人の一生涯の努力は、この眼を明けるためにするのだ。眼が明いて、眼が明きつくしたあげくに來る明るさが、ほんたうの明るさだ。

子供の眼は明るい。しかし子供の眼の明るさは、ほんたうの明るさではない、明るさの型だ。その型の内容を充たすためには、一生涯の努力や苦勞をするのである。さうして、その型が一杯に充たされた状態で明るく透通つて來るのだ。これを外界に就いて云へば、物があるまゝの相でみんな意味となつて來る。又自分に就いて云へば、自分の心があらゆる經驗を収めて再び子供の心に歸つたのだ。

子供が自由畫や自由詩を作つて、その一つが、またその數個

が、またその十數個が、面白いものであつたとしても、子供がい
つまでもさう云ふものを續けて行けると思ふのは誤つてお
る。それは暫くのこととて、やがて一つのきまつた手癖が出来て
くる。この手癖の出来てくるところから、後の仕事がほんたう
の仕事になるのだ。困難と云ふこと、道の遠いと云ふことの分
るのは、それからのことだ。一人の先達に就いて、その導きを受
けると云ふことも、それからの事だ。それは眼の明かない子供
が、眼の明いた大人に就いて眼の明け方の法を覺えるのだ。

こゝで、前に云つた個性の自由と云ふことを考へて見る。そ
の一人の先達に就いて眼を明かせて行くことは、個性の自由
を害することかと云ふに、それは少しも害することにはなら
ないのみならず、それはさうなるのが當然であるのだ。先達の
指導を受けると云ふことは、その先達の指導によつて自分の

個性に檢束を加へて行くことだ。先達が檢束を加へるのでは
ない、先達から來る力によつて自身が自身を檢束するのだ。か
う云ふ檢束が道と云ふものの過程である。

この事はまた、かうも云へる。自分の行くべき道が見える頃
になると、他人の道が尊くなつて見えて來る。それは先達や師
に就くと云ふことは、自分の力で開いて行かうとする道を、暫
く他の力に委ねて、他の力にたよつて開いて行かうとするの
である。自分の道の危険と不安と覺束なさとを知つて、先達の
力に據らうとするのだ。この心持は、一方から見ると、非常に個
性が小さくて弱いことのやうに思へるのであるが、これはほ
んたうに修行をしようとするものの上に、必ず一度來ること
である。つまり自分の小なるを知るわけだ。さうしてそれは、更
に一層自分を大きくすることだ。

自分のことを云ふのは變であるが、私などは師と云ふ師を持つてゐない。なるほど形式的には持つてゐないが、なか／＼どうして、師がなくて、たとひ僅であらうとも、こゝまで來られるものではない。少くとも私には、今まで五六人の古人が順々に臨んで來てゐる。さうして、その度毎に一步づつ道が廣まつて來てゐる。その古人は凡て私の師だ。

師に就く以上、師のために暫く自分の個性が奪はれてしまふやうになるのは止むを得ないことだ。それを自分の個性が劣つてゐることと思つたり、或は自分の個性が無いのだなどと思ふのは考へ違である。また中には、師のために個性が蹂躪されるなどと思ふ人もあるが、皆間違つてゐる。師に奪はれるのは、師の道の中で自分が成長してゐるのだ。即ち師の道の中で、自分の道が開かれつゝあるのだ。

師の道は廣大である。縦横自在の道である。その師の道が自分に臨む状態にもいろ／＼ある。ある時は千里の遠きにおつ放される。また或時は峻烈にきびしく自身に及びかゝつて來る。さう云ふやうに、あらゆる力の試みとなつて、自身の個性に臨むのであるが、それは凡て自身の心を喚び覺まさせることだ。個性の眼を覺まして、その行くべき道の廣さと困難とを自覺させることだ。さう云ふことが個性の自由を害することだと云ふならば、さう云ふ人は、もう救ふべからざる病氣にかゝつてゐるのである。

以上のことは、自然にまた師たるものの困難を語ることとなる。師となることは容易なことではない。それは直ちに多くの個性への傷害となる場合があるからである。或者は偏執な道を取つて、多くの個性の限なき生長を抑へようとする。或者

はまた放漫な自己を取つて、却つて道に入らうとする個性を昏惑に誘はうとする。それよりも甚しいのは、個性の自由と云ふことの意味も分らず、ちやうど子供が自由畫や自由詩を作るやうなのが個性の自由だと解して、師その人からが、自身を泥まぶれにして喜んでゐることである。さう云ふ先達の力によつて、百年泥をこねてゐたとて、道などの分らう筈がない。ただ息が切れて、どつかり坐つてしまふより外はない。俗に尻餅をつくと云ふのだ。さう云ふ例を今の世にも見るが、古人にも見る。

秀れた個性は必ず自分の行くべき道を見つける。道には必ず門がある。その門をくゞるのだ。門をくゞるだけで終へてしまふ個性もある。門をくゞつて或道まで来て終へてしまふ個性もある。その中の或個性だけが一筋の道を遠く遙かに行くのだ。飢と疲と衰とで引返したくなる。それでもまだ行く。物凄くいほど寂しい。それでもまだ行く。さうしてやつとその果てに明るい海が見えて来るのだ。海が見えるところまで行けば、まづ大丈夫である。(太田水穂「和歌俳諧の諸問題」)

和歌は人の心より天地鬼神をも感せしむるなどいふは、和歌の道に限ることにはあらず。たゞ一つの誠もてこそ、大空をも動かしつべし。よし詞の花を咲かせたりとも、誠の貫くにあらざれば益なきことなり。誠も貫きて、詞の色も備はりなば、いと人の心をも動かし、和ぎつべければ、一様に實だにあらば、花はなくてもありなむとはいはじ。

和歌はたゞすなほなれとても、餘りに力もなく味もなく、止水の如くなれば、思を述ぶることも得ず、まいて調はさたにも及ばすなむ。(松平定信)

太田水穂 名は貞一。歌人。長野縣の人。

天地鬼神 「力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあられと思はせ、云々」(古今集假名序)

松平定信 白河城主。老中。文政十二(一八二九)年歿、年七十二。

三三 いちはつの花

正岡 子規

いちはつの花咲きいでて我が目には今年ばかりの春
ゆかむとす

夕顔の棚つくらむと思へども秋まちがてぬ我がいの
ちかも (「行春」二首を録す)

伊藤 左千夫

高山も低山もなき地のはては見る目の前に天し垂れ
たり (「九十九里濱」一首を録す)

長塚 節

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたる
みたれども

正岡子規 名は常規。
歌人。俳人。愛媛
縣の人。明治三十
五年歿、年三十六。

伊藤左千夫 名は幸
二郎。歌人。千葉
縣の人。大正二年
歿、年五十。

長塚節 歌人。茨城
縣の人。大正四年
歿、年三十七。

岡 麓

こほろぎのなくや稻田の月あかり耳をすませば遠潮
の音

島木 赤彦

朝な朝な湖べにむすぶ薄氷晝間はとけて日和つゞく
も

齋藤 茂吉

朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし竝みよ
ろふ山

中村 憲吉

朝ゆふの息こそ見ゆれもの言ひて人に親しき冬近づ
くも

土屋 文明

岡麓 名は三郎。歌
人。東京の人。

島木赤彦 名は久保
田俊彦。歌人。長
野縣の人。大正十
五年歿、年五十一。

齋藤茂吉 醫學博士。
歌人。山形縣の人。
東京帝國大學卒業。

中村憲吉 歌人。廣
島縣の人。東京帝
國大學卒業。

土屋文明 歌人。群
馬縣の人。東京帝
國大學卒業。

くもり空に灯あかりうつれる町のかたふくろふまねてゆく
童あり

こゝにして岩鷲山のひむがしの岩手の國は傾きて見
ゆ（國見峠にて）

○

北原 白秋

いつしかに春の名残となりにけり昆布乾場のたんぼ
ぼの花

古泉 千櫻

さわやかに朝風吹きて港の家海に向きたる窓ひらく
見ゆ

平福百穂 名は貞藏。畫家。歌人。秋田縣の人。昭和八年歿、年五十七。

北原白秋 名は隆吉。歌人。福岡縣の人。早稻田大學卒業。

古泉千櫻 名は幾太郎。歌人。千葉縣の人。昭和二年歿、年四十二。

二三 小園の記

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて、上野の杉を垣の外に控へたり。場末の家まばらに建てられたれば、青空は庭の外に擴がりて、雲行き、鳥翔るさまもいとゆたかに眺めらる。初めてこゝに移りし頃は、僅に竹藪を開きたる跡とおぼしく、草も木も無き裸の庭なりしを、やがて家主なる人の小松三本を栽ゑて稍々物めかしたるに、隣の老嫗の與へたる薔薇の苗さへ植添へて、四五輪の花に吟興を鼓せらるゝことも多かりき。一年軍に従ひて金州に渡りしが、其の歸途病を得て、須磨に、故郷に、思はぬ日を費し、半年を経て家に歸り著きし時は、秋將に暮れんとする頃なり。庭の面去年よりは遙かにさびまさりて、白菊の一もと二もとねぢくれて咲亂れたる、此の景に對し

家 東京市下谷區上根岸町にあり。

一年 明治二十八年三月從軍記者として金州に渡る。金州 關東州の都邑。金州灣に臨む。故郷 松山市なり。

て静かに昨日を思へば、萬感そゞろに胸に塞り、辛き命を助りて歸りし身の衰は、たゞ此の嬉しさに勝たれて、思はず、「三逕就_レ荒。」と口ずさむも涙がちなり。ありふれたる此の花、狹苦しき此の庭が、かくまで人を感じしめんとは、曾て思ひ寄らざりき。ましてこれより後、病彌、募りて足立たず、門を出づる能はざるに



正岡子規筆蹟

至りし今、小園

は余が天地にして、草花は余が唯一の詩料となりぬ。余をして幾何か獄窓に呻吟するに勝ると思はしむるものは、此の十歩の地と數種の芳葩とあるがために外ならず。次の年、春暖漸く催して、鳥の聲いとうらゝかに聞えしある日、病の窓を開きて、端近くにじり出て、讀書に勞れたる目を遊

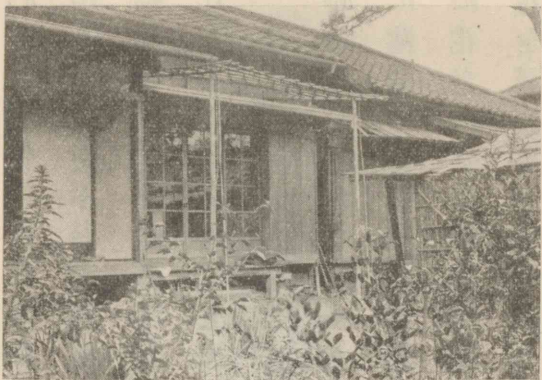
三逕就_レ荒、「三逕就_レ荒、松菊猶存。」陶淵明の歸去來辭

大佛をうつめてし
ろし花の雲 升

ばすに、いき／＼としたる草木の生氣は、手のひらほどの中にも動きて、まだ薄寒き風のひや／＼と病衣の隙を侵すも、いと心地よく覺ゆ。これも隣の姫より貰ひしといふ萩の刈株、寸ばかりの緑をふいて、逞しき勢は秋の色も思はる。眞晝過より、夕陽椎の樹に落つるまで、何を見るときもなく、酔うたるが如く、勞れたるが如く、うつとりとして日を暮すことさへ多かり。

今まで病と寒氣とに惱まされて、弱り盡くしたる余は、此の時新たに生命を與へられたる小兒の如く、此より萩の芽と共に健全に育つべしと思へり。折ふし黄なる蝶の飛來りて垣根に花をあさるを見ては、そゞろに我が魂の自ら動き出で、共に花を尋ね、香を探り、物の芽にとまりて、しばし羽を休むるかと思へば、低き杉垣を越えて隣の庭を打廻り、再び舞戻りて松の梢にひら／＼、水鉢の上にひら／＼、一吹き風に吹きつれて、高

く吹かれながら、向うの、屋根に隠れたる時、我にもあらず惘然として自失す。忽ち心づけば、身に熱氣を感じて、心地なやまし



子 規 庵

く、内に入り、障子たつると共に、蒲團引被れば、夢にもあらず、幻にもあらず、身は廣く限無き原野の中にありて、今飛去りし蝶と共に狂ひまはる。狂ふにつけて、何處ともなく、數百の蝶の群來りて遊ぶをつら／＼見れば、蝶と見しは皆小さき神の子なり。空に響く樂の音につれて、彼等は躍りつゝ舞上がり飛び行くに、我もおくれじと、茨葎のきらひなく踏みしだき、躍り越え、思はず野川に落ちしよと見て、夢覺むれば、寢汗した

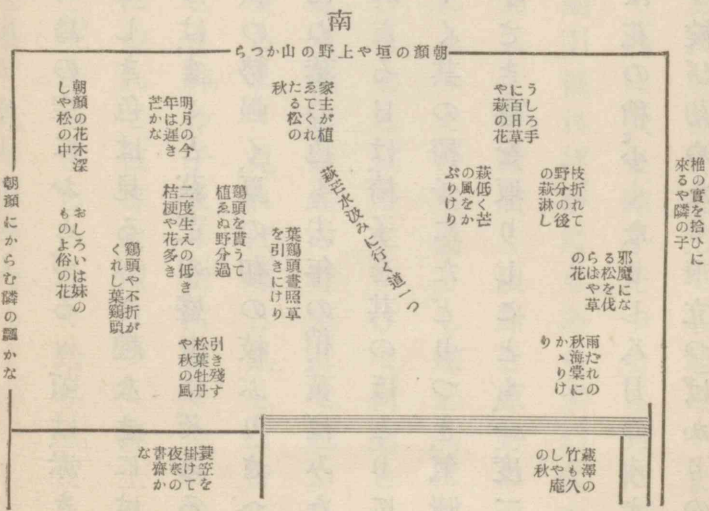
たか襦袢を濕して、熱は三十九度にや、上りけん。

げん／＼の花盛り過ぎて、時鳥の空におとづる、頃は、赤き薔薇、白き薔薇咲満ちて、かんばしき色は見るべき趣なきにはあらねど、我が小園の見どころは、まこと萩芒の盛りにぞあるべき。今年は去年に比ぶるに、萩の勢強く、夏の初の枝ぶりさへいたく蔓りて、末頼もしく見えぬ。葉の色も去年の稍、黄ばみたるには似ず、緑いと濃し。空晴れたる日は、椅子を其のほとりに据ゑさせ、人に扶けられ、やうやく其の椅子にたどりつき、氣晴しがてら萩の芽に著きたる小さき蟲を取りしことも、一度二度にはあらず。

桔梗、撫子は實となり、朝顔は花の稍、少くなりし八月の末より、待ちに待ちし萩は一つ二つ綻び初めたり。飛立つばかりの嬉しさに、指を折りて、あすは四つ、あさつては八つ、十日目には

千になるらんと思ひ設けしほどこそあれ、ある夜野分の風烈しく吹出でぬ。やすからぬ夢を結びて、あくる朝、日たけて眠より覺むれば、庭に何やらのゝしる聲す。心もとなく這出でて、何ぞと問ふ。今までさしも茂りたる萩の枝、大方折れしをれたるなりけり。ひたと胸つぶれて、いかにせばやと思へど詮なし。

かくと知りせば、枝に杖立てて置かましをなど悔ゆるもおろかなりや。瓦吹飛ばし



たる去年の野分にだにかうはならざりしを、今年の風は萩のために方角や悪しかりけん。此の日は晴れわたり、稍、秋氣を覺え初めしが、余は例の椅子を庭に据ゑさせ、バケツと金盥とに水を湛へて、折れ残りたる萩の泥を洗へりしかど、空しく足の痛みを増したるばかりにて、泥つきし枝の先は、蕾腐りて、つひに花咲くことなかりき。園中何事もなきは、只松と芒とのみ。

去年の春、彼岸や、過ぎし頃と覺ゆ。鷗外漁史より草花の種幾袋贈られしを、直ぐに播きつけしが、百日草の外は何も生えずして止みぬ。中にも葉雞頭を欲しかりしを、いと口をししく思ひしが、何とかしけん、今年夏の頃、怪しき芽をあらはししものあり。去年葉雞頭を埋めしあたりなれば、必定それなめりと、竹を立てて大事に育てしに、果して二葉より赤き色を見せぬ。嬉しくて、四邊の晝照草など引きのけ、やう／＼尺餘になりし頃、

晝照草 松山地方にて松葉牡丹をいふ。

鷗外漁史 森鷗外をいふ。

野分荒れしかば、こればかり氣遣ひしに、思の外に萩は折れて、葉雞頭は少し傾きしばかりなり。扶け起して竹杖に縛りなどせしかば、恙なくて今は二尺ばかりになりぬ。瘦せてよろ／＼としながら、なほ燃ゆるが如き紅しだれて、いとうつくし。二三日ありて、向ひの家より貰ひ來れりとて、肥太りたる雞頭四本ばかり植添へたり。其の次の日なりけん、朝まだきに裏戸を叩く聲あり、戸を開けば、不折子が大きな葉雞頭一本引提げて來りしなりけり。朝霧に濡れつゝ、手づから植ゑて去りぬ。雞頭、葉雞頭かゞやくばかり華やかなる秋に壓されて、萩ははや散りがちなりしもあはれ深し。

薔薇、萩、芒、桔梗などを惠まれて、余が小樂地の創造に力ありし隣の老嫗は、其の後移りて他に在りしが、今年秋風に先立ちてみまかりしとぞ聞えし。

不折子 中村不折。
洋畫家。名は鉦太郎。長野縣の人。

ごて／＼と草花植ゑし小庭かな (正岡子規「子規全集」)

<p>形容詞及び之と同じ活用形の助動詞と助詞「とも」との接続</p>	<p>ち上げ候。</p> <p>(1) 如何に路は遠しとも厭はじ。 (2) 急ぎ行くべしとも暫く待たれよ。</p>	<p>ち上げ候。</p> <p>(1) 如何に路は遠くとも厭はじ。 (2) 急ぎ行くべくとも暫く待たれよ。</p>	<p>て確定の條件とせし誤。</p> <p>形容詞及び之と同じ活用形の助動詞に「とも」の添はる時は、連用形を受く。</p>
<p>助動詞「る」「しむ」「ます」と助動詞「べし」「らし」「まじ」との接続</p>	<p>某新聞は日曜日と大祭日の (1) 御來車下されべく候。 (2) 幼き者には習はしむるべからず。 (3) 多くの人に見さするらし。 (4) やすくとは欺かれまじ。</p>	<p>(1) 某新聞は日曜日と大祭日 1) 御來車下さるべく候。 (2) 幼き者には習はしむべからず。 (3) 多くの人に見さするらし。 (4) やすくとは欺かるまじ。</p>	<p>誤解を生じ易き時は各固て「べし」「らし」「まじ」が上の助動詞の終止形を受くべきを「連體形」を受けたる誤。 未然 連用 終止 れれ るる べし させ させ さす さす べし させ させ</p>
<p>動詞の上二・下二・加變・佐變・奈變と助詞「な」との接続</p>	<p>(1) 決して油斷するな。 (2) 遊藝など習はしむるな。</p>	<p>(1) 決して油斷すな。 (2) 遊藝など習はしむな。</p>	<p>助詞「な」はすべての動詞の終止形を受く。故に四段の如き終止と連體と同形のものには誤らず。</p>

文部省の許容案に依るものは今文の語法として差支なければ之を省略せり。

讀本の十二段・下二

(一) 無用の品ヲ下ニ棄テテ

(二) 無用の品ヲ下ニ棄テテ

讀本

誤り易き語法

種類	誤	正	備考
動詞・助動詞と名詞との接續	(1) 今年は花の綻ぶ事甚だ早し。 (2) 子女に金銭を持たす事は宜しからず。	(1) 今年は花の綻ぶる事甚だ早し。 (2) 子女に金銭を持たする事は宜しからず。	名詞はすべて動詞・形容詞・助動詞の連體形を受く。上の誤は上二段・下二段・左變及び之に準ずる活用をなす助動詞に起る。
佐變の動詞と助動詞 「しむ」「ず」「おら」 「し」「む」「む」との接續	(1) 日々の出来事を録せしむ。 (2) かゝる慶事を祝さずばあるべからず。 (3) 人の感情を害さざるやうにすべし。 (4) 我々は何人にも抗せじ。 (5) 國法を犯すものは罪せむ。	(1) 日々の出来事を録せしむ。 (2) かゝる慶事を祝せずばあるべからず。 (3) 人の感情を害せざるやうにすべし。 (4) 我々は何人にも抗せじ。 (5) 國法を犯すものは罪せむ。	佐變の未然形「せ」 しむ ず ざり じ じり ず ざり じ じり
佐變の動詞と助動詞 「き」「し」「しか」の連體形「し」との接續	この寺を建立ししは何年頃ならむか。 汝は論語を讀まるか。	この寺を建立せしは何年頃ならむか。 汝は論語を讀まるか。	「き」「し」「しか」は佐變の動詞には左の如く接續す。未然形「し」は連體形を受く。
動詞・助動詞と助詞 「ば」との接續	(1) 明日好天氣なれば遠足せむ。 (2) 御暇に候へば御來車まち上げ候。	(1) 明日好天氣ならば遠足せむ。 (2) 御暇に候はば御來車まち上げ候。	助詞「ば」が上の動詞・助動詞の未然形を受けて、未定の條件とすべきを、已然形を受けて確定の條件とせし誤。
形容詞及び之と同じ活用形の助動詞と助詞 「とも」との接續	(1) 如何に路は遠しとも厭はじ。 (2) 急ぎ行くべしとも暫く待たれよ。	(1) 如何に路は遠くとも厭はじ。 (2) 急ぎ行くべくとも暫く待たれよ。	形容詞及び之と同じ活用形の助動詞に「とも」の添はる時は、連用形を受く。
助詞「と」の用法	某新聞は日曜日と大祭日の翌日は休刊す。	(1) 某新聞は日曜日と大祭日の翌日は休刊す。 (2) 某新聞は日曜日と大祭日との翌日は休刊す。	誤解を生じ易き時は各個に「と」を添ふべし。
係結	(1) 遠近の山々烟霞の中にぞほの見ゆ。 (2) かゝる人なむ世にも珍らし。	(1) 遠近の山々烟霞の中にぞほの見ゆる。 (2) かゝる人なむ世にも珍らしき。	係結 ぞほ………連體形 なむ………連體形

<p>「さ」の連體形「し」との接續</p>	<p>この手を凝らししは作らむか。</p>	<p>この手を凝らししは作らむか。</p>	<p>「さ」の連體形「し」との接續</p>
<p>動詞・助動詞と助詞「か」との接續</p>	<p>汝は論語を讀まるか。</p>	<p>汝は論語を讀まるか。</p>	<p>「か」は連體形を受く。</p>
<p>動詞・助動詞と助詞「ば」との接續</p>	<p>(1) 明日好天氣なれば遠足せむ。 (2) 御暇に候へば御來車まち上げ候。</p>	<p>(1) 明日好天氣ならば遠足せむ。 (2) 御暇に候へば御來車まち上げ候。</p>	<p>助詞「ば」が上の動詞・助動詞の未然形を受けて、未定の條件とすべきを、已然形を受けて確定の條件とせし誤。</p>
<p>形容詞及び之と同じ活用形の助動詞と助詞「とも」との接續</p>	<p>(1) 如何に路は遠しとも厭はじ。 (2) 急ぎ行くべしとも暫く待たれよ。</p>	<p>(1) 如何に路は遠くとも厭はじ。 (2) 急ぎ行くべくとも暫く待たれよ。</p>	<p>形容詞及び之と同じ活用形の助動詞に「とも」の添はる時は、連用形を受く。</p>
<p>助詞「と」の用法</p>	<p>某新聞は日曜日と大祭日の翌日は休刊す。</p>	<p>(1) 某新聞は日曜日と大祭日の翌日は休刊す。 (2) 某新聞は日曜日と大祭日との翌日は休刊す。</p>	<p>誤解を生じ易き時は各個に「と」を添ふべし。</p>
<p>係 結</p>	<p>(1) 遠近の山々烟霞の中にぞほの見ゆる。 (2) かゝる人なむ世にも珍らしき。 (3) 正成こそ古今に稀なる忠臣ならむ。</p>	<p>(1) 遠近の山々烟霞の中にぞほの見ゆる。 (2) かゝる人なむ世にも珍らしき。 (3) 正成こそ古今に稀なる忠臣ならむ。</p>	<p>係 結 ぞ 係 結 なむ 連體形 こそ 已然形</p>
<p>助動詞「き」「ごとし」の特別用例</p>	<p>(1) 意外の事のみ出で來き。 (2) その價安きがごとけれど實際は高きなり。</p>	<p>(1) 意外の事のみ出で來き。 (2) その價安きがごとけれど實際は高きなり。</p>	<p>助動詞「き」は加變の動詞の連用形には續かず。 「來き」「來し」は「來し」に例なし。 「ごとし」には已然形「ごとくあれ」の活用なし。故に「ごとくあれ」を用ふ。</p>
<p>動詞の上二段・下二段・加變・加變・佐變・奈變・奈變と助動詞「べし」「まじ」「らむ」「らまじ」の接續</p>	<p>(1) 朝は必ず日の出前に起きべし。 (2) 無用の品とて妄りに捨つべからず。 (3) 悪人といへども子は捨てまじ。 (4) この恨は決して忘るまじ。 (5) 夜もはや明るらし。 (6) 峯の老松幾代か経らむ。</p>	<p>(1) 朝は必ず日の出前に起きべし。 (2) 無用の品とて妄りに捨つべからず。 (3) 悪人といへども子は捨てまじ。 (4) この恨は決して忘るまじ。 (5) 夜もはや明るらし。 (6) 峯の老松幾代か経らむ。</p>	<p>起 捨 來 爲 死 べし まじ らむ らし 終止</p>
<p>動詞と助動詞「り」の接續</p>	<p>我等は某先生の教を受けり。</p>	<p>我等は某先生の教を受けり。</p>	<p>「り」は四段・佐變の命令形を受く。 他の活用の動詞にはつゞかず。</p>
<p>助動詞「ます」の連用形と助動詞「たり」「き」との接續</p>	<p>(1) 戸外の様子を見させき。 (2) 未明に起きさせたり。</p>	<p>(1) 戸外の様子を見させき。 (2) 未明に起きさせたり。</p>	<p>「ます」(使役助動詞)を佐變活用の形に活用したるより生ずる誤。 連用形 させ たり たり</p>
<p>動詞の上二・下二・加變・佐變・奈變と助詞「な」との接續</p>	<p>(1) 御來車下されべく候。 (2) 幼き者には習はしむるべからず。 (3) 多くの人に見さすらし。 (4) やすくとは欺かれまじ。</p>	<p>(1) 御來車下さるべく候。 (2) 幼き者には習はしむるべからず。 (3) 多くの人に見さすらし。 (4) やすくとは欺かるまじ。</p>	<p>助詞「な」はすべての動詞の終止形を受く。故に四段の如き終止と連體と同形のものには誤らず。</p>

文部省の許容案に依るものは今文の語法として差支なければ之を省略せり。

婦り長も語志

動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続
動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続
動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続
動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続	動詞・助動詞と助動詞 「か」の接続

國文選(第二版)

價	定
卷一、二各金六拾五錢	
卷三、四各金六拾參錢	
卷五、六各金六拾錢	
卷七、八各金五拾七錢	
卷九、十各金五拾五錢	

昭和八年七月二十七日 印刷
 昭和八年七月三十一日 發行
 昭和八年十二月五日 訂正印刷
 昭和八年十二月九日 訂正發行



著者 垣内松三

發行者 株式會社 明治書院

東京市神田區錦町一丁目十番地

取締役社長 三樹退三

印刷者 細谷祐三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地

發行所

東京市神田區錦町一丁目
 振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話神田(25) 二一四七番(3)

山口縣立安下庄中學校第二學年
大石正勝